



# 孤野物語

はて、見なれぬお方たちじゃがどちらから来られましたんじゃ。

なに、夜中に山をこえて来られたんじやと。そりやあ、まあ大変じゃったろう。日照り続きの今日この頃じゃ。昼間は暑うて何ともならん。じゃが、夜道は昼間とちごうて涼しいけれどもこわいでのう。

やや、なんと、夜道はなれておるじやと。今時、めずらしいお方たちじや。

昔と云うても 祖父のそのまた祖父の頃じゃが、夜中起きて提灯たよりに夜道を歩き政所までお茶つみに行ったとは聞いておる。

何と政所から来られたと云われるか。政所には私の遠い親せきがすんでおると祖父から聞いた。あんたさんらもまんざら、他人のような気がせぬわい。

長旅でおつかれのことじやろう。私が立てた菰野茶じゃが一服飲んで休んでいって下さいや。

ああ、この服に付いた血のことですかい。夕べ夜中にニワトリのけたたましい声がするのでカイ中電灯を持ってあわててニワトリ小屋に走ってみると、雄鳥の首に何かかみ付いておりましてな。となりではめんどりが首を羽の下につつこんだままボール球のようになっておりますじや。

しよてに、私はモグラカイタチじやろうと思うた。じゃが、カイ中電灯でよう見るとそれはもっと大きなけものじやった。きよとんとした丸い目、ニワトリにかみ付いておる尖

った口元、オス猫ほどの大きさ。そうじゃ、奴は子タヌキじゃった。

私は腹が立って、その子タヌキをこん棒でたたき殺してやろうかと思うたが、考えてみれば子タヌキとて何か食べて生きてゆかねばならぬ。食物れんさの世界じゃからのう。人間だつて生き物を殺してたべておるんじゃ。子タヌキがニワトリをおそうたとて何のところがあろう。

さりとして、このままでは私がかつておるオンドリが殺されてしまう。で、私は子タヌキの首根っこを押さえて引つ張り出したんじゃ。タヌキの齒はカミソリのようによう切れると聞いておったのでこわかったが、そんなことでひるんではおられなかった。

私は猫をぶら下げるようになつこうで子タヌキを持ち上げた。子タヌキはやつとオンドリを口からはなすと逃れようとして体をくねくねさせてあばれたんじゃ。私はなにもタヌキ汁にして食おうと云うんじやない。逃がしてやるつもりじゃった。私が手をちよつとゆるめると、子タヌキは手からするりと抜け落ちて逃げてゆきましたじゃ。

これは今朝、家内がつくつた肉まんじゅうじゃ。ぶかつこうじゃが決してタヌキのマンジュウ屋のマンジュウではござらぬ。えんりよなく食べて下され。

いやあ、人里はなれて住んでおりますと人恋しいと云うか、誰とでも話がしたくなりましてな。

そうですかい。タヌキの話がお好きですかい。タヌキの話にかかわらず民話なら何でも聞きたいと云わっしゃるか。そんなじゃ、親父から聞いた話などしましよかのう。多少時

間がかかるがお急ぎではござりませぬかい。

そうですね、そうですね。尾高の観音様におまいりされての帰りですかい。それじゃ、少し冷えておりますじゃが、肉マンジュウでも食べてゆるりとしていつて下され。

私の親父と云うのは明治四十一年の生まれじゃ。親父は子供の頃に聞いたと言つておつたから、この話は主に今から百年も前のことじゃ。その頃は菰野辺りも人家がまばらで、大方、森や林や草原で被われていたことじゃろう。

一

当時は乗物といえば馬車かカゴじゃった。その日もギンベエさんたちの乗る馬車は路面の小砂をがりがり鳴らし、時々、落ちておる小石をがたんがたんとはね飛ばしながら、こつこつとヒヅメの音をさせて帰り道を急いでおつた。道は馬車がようやくすれ違える程の広さじゃった。それでもこの道は村と村をつなぐ幹線道路じゃった。馬車が奥郷まで来ると、ギンベエさんはえんりよがちにぎよ者の男に話しかけたもんじゃ。

「ちよつと、ここいらで降ろしてくださらんか」

「降りてどうなさるね」

「ぐいっとやっ行って行くのも精進おとしと云うもんじゃ」

「なるほどそうか、わしもつき合おうかのう」

馬車に乗っておった男と云えばギンベエさんときよ者の二人だけじゃった。

「そりゃ、困る。あんたらは底ぬけじゃ。わしらは帰れなくなる」

女たちは急いでおった。家に帰ったら夕飯の支度やら何やかやあるでう。ぎよ者は女たちの非難の声に仕方なく断念したもんじゃ。

「そんじゃ、ギンベエさんだけ行きなさるがええ」

馬車はギンベエさんを降ろすと、また、走りだした。

「ギンベエさん、早く帰らんと、おタマさんにしかられるぞな」

ギンベエさんは馬車を見送りながら、女たちにぶるんぶるんとぎったこぶしを振って見せた。

「何の、女ぼうがこわくて酒が飲めるかってもんだ」

夕日が西の山のはしにかかって、女たちの顔を真っ赤にそめておった。

「あらあら、おタマさんに言いつけてやろ」

女たちのにぎやかな笑い声を乗せて馬車はとおざかっていった。ギンベエさんは馬車を見送ると、なわのれんを押し分けて、たて付けの悪い入口の障子をがたごとと開けて酒屋に入った。

「酒良さん、ごぶさたしとったのう。障子が閉まつとるんで、休みかと思たが な」

客は誰も居らなした。酒屋の主人はゲタをつっかけて奥の間から出て来た。

「ギンベエさん、久しぶりじゃ。なんの、開けておくとタヌキの奴が悪さをしに来るんで

な

ギンベエさんは板の間にこしを下ろした。

「どんな悪さをしに来るんじゃ」

酒屋の主人はいつものように一合マスを持って板の間の奥に並べてある酒ダルの前に行つた。

「それがのう、最近は何に化けて酒を買いに来るんじゃ」

奥からとつくん、とつくんという酒ダルの呑口から酒が注がれる音が聞こえた。ギンベエさんは唇をなめながら相づちをうった。

「木の葉っぱで買いに来られちゃ、そりゃ困る」

酒屋の主人はなみなみと注いで一合マスをギンベエさんの前に置くと、番台へ行って小ダンスの引き出しからゼニを出した。

「ゼニは本物を置いて行くんじゃ。これがそうじゃが、本当のゼニじゃろう」

ギンベエさんは先ず一合マスから酒を一口すすつたもんじゃ。

「なるほど、これは古いゼニじゃの。しかし、ゼニさえもらえばタヌキもお客さんじゃ」

「そりゃ、そうじゃが、こちらが化かされはせんかと気色が悪うてのう」

ギンベエさんは店にあるスルメをかじりながら、一合マスの酒を三杯ほど飲んですつかり良い気分になった。

「外は暗くなつてしもうた。細かいのが無いんで、これでおつりをもらえんかのう」

「あいにくじゃ、タヌキが置いていったゼニで良ければおつりを出しますが。何の、つけでもええですぞ」

「いや、タヌキのゼニも珍しい。そのゼニもらいましよう」

「そいじゃ、細かいんで、コヨリでむすんであげますわ」

酒屋の主人はタヌキが置いていったというゼニを四つに分けて、それぞれに円いゼニの中心にあいている四角い穴にコヨリを通してつづり合わせた。

「こりゃ、ごていねいに」

ギンベエさんはその四つのつづりを腹巻きの中に押しこんだ。

「チョウチンを持って行きなされ。新月で、その上くもり空じゃから、外は一寸先もやみじゃ」

ギンベエさんは酒良とすみで太く書かれたチョウチンを下げて、なわのれんを押し分けながら外に出ると、歩きやすいように着物のすそをはしよった。

酒良のある奥郷とギンベエさんが住む竹成の間には昼間も暗い森がある。その中を通る道をシシキ道と呼んでおった。

ギンベエさんは良い気分でチョウチンをさげてシシキ道を歩いた。

遠くに小さな明かりが見えた。ギンベエさんは何だろうと思って近づいていった。それは小さな屋台じゃった。

「ギンベエどん。ふかしたてのマンジュウですぞ。一つ買っておくんなさい」

暗い灯明に照らされて、屋台の中には蒸し立てのマンジュウがおいしそうに湯気を立てて並んでおった。

「さあて、見たこともないマンジュウ屋じゃのう」

マンジュウ屋はギンベエさんを見てにっと笑ろうた。

「みんな帰ったのに、ギンベエさんだけがどうして帰らないかって、おタマさんがかんかに怒ってますぞ。みやげにマンジュウでも持って帰らないと、しめ殺されるかもしれませんぜ」

ギンベエさんは肩をすぼめて、首を振った。

「おいおい、こわいことを言うな。わかったよ。買うとも、買ってやるよ」

ギンベエさんは竹皮にほっかほかの大きなマンジュウを十個ほど包んでもらうと、腹巻きからコヨリを通したゼニを一つづり出してマンジュウ屋に渡した。

「気をつけて帰りなされ。最近、この辺りにや、悪いタヌキが出て、人をたぶらかすそうじゃ」

マンジュウ屋はギンベエさんに、そう言うのと屋台をひいて遠ざかっていった。

家に着くころにはぼつりぼつりと降り出しておった。

「借りたチョウチンがぬれてしまうところじゃった」

ギンベエさんがそう言う中に入ると、おタマさんが仁王様のような顔で立っておった。「みんな帰ったのに、あんただけがどうして帰れなかったんだね」

おタマさんの言葉はマンジュウ屋が言ったとおりじゃった。

「おタマ、悪かったな。ほれ、おみやげじゃ」

ギンベエさんは竹皮に包まれたマンジュウを出した。

「マンジュウって、匂いの変だよ」

おタマさんは鼻をくんくんさせた。

「出来たてじゃ。温かい内に食え」

ギンベエさんは座敷に上がると、竹皮包みのワラひもをほどいた。竹皮の中から、座敷に馬フンが転げ落ちた。ほんに馬フンは色も形も大きさもマンジュウによう似とる。

「何だね、あんた。こんなものを私に食わせようって言うのかね」

ギンベエさんの顔にぬれたぞうきんが飛んできた。頭にも激しくほうきがぶつかってき  
た。

「そうか、おかしいと思うた。あ奴はタヌキじゃたか」

翌日、ギンベエさんはチョウチンを返しに酒良に出かけた。酒良の主人は笑いながらギンベエさんを迎えた。

「タヌキの奴にやられなすったね。ほら、これは昨夜ギンベエさんに渡したぜニじゃ」

酒屋の主人はコヨリを通した銭を見せた。

「おタマにはしかられるし、えらい目にあつた」

「奴は捕まえて、裏の小屋に置いてある。」

良かったらあげますぞ。タヌキ汁にでもしてかたきをうってやりなされ」

四足をしばられたタヌキが小屋ののきにつり下げられておつた。ギンベエさんはそのタヌキをもらって棒にしぼり、肩にかついで帰った。家に着くとタヌキをよいしょと庭に降ろして、家の中に声をかけた。

「おタマ、包丁を持って来い。タヌキ汁をつくってやる。昨夜、俺たちをだました奴だ」

おタマさんは包丁を持って出て来た。タヌキはかん念したのか目を閉じたままじゃつた。

「おや、大きなタヌキじゃないか。あんた、重かったやろ」

おタマさんは包丁を持ってタヌキに近づいた。

「痛かったでしょう。かわいそうに」

おタマさんはタヌキをきつくいましめているナワをぶつつり、ぶつりと切つたのじゃつた。

もうすっかりかん念しておつたタヌキじゃつたから倒れたままぼかんとしておつた。

「おい、せっかく酒屋が捕まえてくれたタヌキを逃がすのか」

おタマさんはタヌキを起こしてやった。

「もういたずらはするんじゃないよ。さつさとお行き」

タヌキは丸い大きな目から涙をこぼしながら、何度も何度もおタマさんの方を振り返り振り返りしながら森にもどっていったそうじゃ。

シシキ道のそばの竹やぶに四、五寸大の穴がぼこぼこあいておった。穴の中はふくざつなトンネルになっておって、その中にタヌキの親子が住んでおったのじゃ。そうそう、親ダヌキはあのマンジュウ屋に化けてギンベエさんに馬フンを売りつけた奴じゃった。奴はギンベエさんのかみさんに助けられてからすつかり改心しておった。酒良にも現れなくなつたそうじゃから、大好きな酒もやめておつたのじゃろう。

産婆のお富さんが自転車のペダルをふみながら、片手で巻きタバコを吹かしながらやってくるんじやが、お富さんはいつもタヌキの穴の前に火がついた吸いガラを捨てるんじやつた。

ちよつと前の、あれは乾いた風が吹く寒い日の朝じゃつた。タヌキの親子が気づいて消し止めたから良かったものの、その時は周囲の枯れ草に燃え移つて、もう少して山火事になるところじゃつた。

その日も竹やぶは乾いた風にしなりながらさわがしい声を出しておつた。

シシキ道は竹やぶのところ曲がりくねっておつて先が見えないのに、お富さんはいつものようにいきおいよくペダルをこいで来る。当時のことじゃ、大方、車といえば馬車か大八車じゃつたから、道が急角度に曲がつておつてもさほど不便はなかつたんじや。

反対方向からも村の小学校の校長先生がやつぱり急いでペダルをこいで来る。自転車の少ない時代じゃ。村で自転車に乗るのは小学校の校長先生と産婆のお富さんだけじゃつた。産婆のお富さんも小学校の校長先生もまさか、反対方向からめつたに來ない自転車が來ると思わなんだ。

案の定、ちよつと曲がつた所でぶつかることになつたのじゃ。校長先生はさすがに男じやつた。お富さんの自転車を見るや、とつきにきいーつと急ブレーキをかけて、直前でとまつた。ところが、お富さんの方は右手の人差し指と中指の間にタバコをはさんで、片手運転をしておつたから止まらない。そのままのいきおいで校長先生の自転車にぶつかつていった。校長先生がふつとび、その上にお富さんが落下した。お富さんは校長先生の体の上で一回バウンドすると、いきおい余つてところと枯れ草の上に転がつた。

「あーら、ごめんなさい」

お富さんは真つ赤な顔になって立ち上がった。

「いやあ、おけがは」

やせつぽちの校長先生はお富さんの体重につぶされておつて起き上がれない。お富さんは校長先生を引っ張り起こした。

「僕が悪いんです。急いでいたもんですから」

校長先生は頭をかいて決まり悪そうに笑つた。

「あら、良いんですの」

お富さんはもう品をつくって、すまし顔になっておった。

タヌキは“何が良いんですの”だと思つた。だって、お富さんがすつていた火のついたタバコがタヌキの穴の前まで飛んできたんじゃない。しかも、それが枯れ草の近くへころろと転がっていった。タヌキは気が気でないが、すぐに穴からはい出して行くことも出来なんだ。

校長先生は自転車に乗ろうとしたがたおれた拍子にチェーンが外れてしもうて、もたもたしておった。お富さんの方もたおれた拍子に自分の自転車のハンドルが曲がってしまったので真つすぐに直そうとしておった。そうこうしているうちに、あおるようなつむじ風に吹かれて枯れ草の中を左右に転がっておったタバコの火が一所にとどまると、ついに枯れ草に燃えうつたのじゃった。

「あらっ、何か変なおいがしますわ」

それは枯れ草の燃えるにおいじゃった。タヌキ穴の前の枯れ草からぱつと炎があがった。「あつ、火事だ」

二人は近くの木の枝を折ってたたくやら、靴でばたばたとふみつけるやらして、ようやく火を消し止めた。

「危なく大火事になるところでしたわね」

校長先生は学校の方角に、お富さんは妊婦の家の方角に、それぞれ行ってしまった。タヌキの親子はふみつぶされなんだ穴から出て、やれやれと胸をなでおろしこげた枯れ草の

上を歩いてみた。親子の足の裏はこげた枯れ草でまっ黒になってしもうた。ここそこに草の実がおいしそうにはせておったから、子タヌキたちはむじゃきにそれをひろつて食べた。

焼け跡の地面はまだぬくとかつたが、もう、火は大丈夫じゃった。しかし、このままでお富さんの投げ捨てるタバコの火で、この辺りがいつ火事になることやら心配じゃった。

タヌキはあれから人をたぶらかせたことはない。ギンベエさんのかみさんとかたく約束したことじゃったからのう。しかし、タヌキはこの約束を破っても、ここいらでお富さんを少しこらしめておくべきじゃと考えた。

産婆は夜中でも妊婦が産気づけばその家に行かねばならぬ。夜になると、お富さんの自転車のハンドルの前に油紙をはり付けたガン灯が下げてあるのはそのためじゃった。ガン灯というのはロウソクなどを使ったチョウチンのようなもんじゃが、前方だけをてらすので、今で云えば懐中電灯のようなもんじゃ。

真冬の北風が吹く夜じゃった。北風が雨戸をかたかた云わせるのにまじつて。とんとんと出入り口の戸をたたく者がおった。お富さんは昼間にみてやった隣村の妊婦が産気づいたのじゃろうと思うた。そこで戸口に向かつて大きな声を出した。

「へえっ、わかりましたわな。今、したくをして、さつそく、行きますでなあ」

お富さんは女の一人住まいじゃったから、男衆は気を使って、戸口から声をかけるだけで、家の中に入らん。戸をたたく音が止んだ。お富さんの返事を聞いて、男は安心してどつたようじゃった。

お富さんは赤いタスキや白い上つばりを風呂敷に包んだ。タバコとマッチをたもとに入れると、ぞうりをはいた。風呂敷包みを自転車の後の荷台にひもでしっかりゆわえらると、自転車にまたがった。

北風の吹く日に自転車をこぐのは大変じゃった。途中でつかれて、きゆうけいすることにした。神社の灯ろうに小さな明かりがついておった。お富さんは自転車からおりると灯ろうの明かりをたよりにたもとからタバコを出して、風を防ぎながらマッチで火をつけた。一本すうと、物足りなくて、もう一本すった。そして、三本目は口にくわえて、自転車に乗った。お富さんのふむペダルに合わせて自転車のハンドルの前に下げたガン灯が左右におおきくゆれて、暗くなったり明るくなったりしておった。そして、お富さんがくわえたタバコの赤い火先も螢の光のように強くなったり弱くなったりして、やみの中を流れていったもんじゃった。

すっておったタバコが短くなったので、お富さんはふいつとそれを道ばたにはき捨てた。きつと妊婦がおなかを痛めて待っておるに違いない。急がなくてはと、ペダルに力を入れた。風のせいも、力を入れるわりに前へ進まない。

ふつと見ると、自分が乗っている自転車のとなりではき捨てたタバコが赤い火先を燃やしながら転がっておった。しかも、ごていねいに、神社で吸った一本目のも、二本目のも追っかけてくるんじや。

お富さんは気味が悪いわと思いつながら一生けんめいにこぐ。となりを転がる三つのタバコの火はだんだんと大きくなる。始めはこぶしぐらいの大きさじゃった。そのうちに太股ぐらいになった。お富さんは必死でこぐ。やがて、手おけぐらいになり、シシキ道までくると、ついにたらいほどになって、真つ赤に焼けた火が左右からお富さんの自転車をはさむようにせまってきた。

夜空から大きな声が聞こえた。

「タバコの火は火事の元じや」

「きやつ、助けて、助けて」

お富さんの叫び声を聞いたのは酒良から一杯きげんでもどる途中のギンベエさんじゃった。

ギンベエさんは途中の木の枝にハンドルを引っかけて一生けんめいにペダルを空回ししているお富さんに声をかけた。

「何してなさるね」

ギンベエさんは持っているチョウチンをお富さんに近づけて、げげんな顔をした。

「もう、火がついたタバコの投げ捨てはしないからゆるして」

お富さんは一人でさわいでおった。

「ははん、また、タヌキの悪さだな。こらつ、出てこい。タヌキ汁にするぞ」

ギンベエさんの声でお富さんは正気にもどった。大きな親ダヌキと小さな二匹の子ダヌキがこそこそとしげみのやみにかくれていった。



お富さんは間もなく妊婦の家に着いた。じゃが、妊婦はまださしせまっている様子ではなかった。

「あんなに、とんとんと戸をたたいたじゃないの。だから、急いで来たのに」  
妊婦の家では産婆のお富さんがあまりにも早く来たのでおどろいておった。

「いいや、わしはたたいてねえです。」

これからぼつぼつ行こうかと思っていたところじゃから」

「じゃ、誰がたたいたって云うの」

「きつと、タヌキの奴の仕業に違いねえ」

そんなことがあってから、お富さんはタバコの火の投げ捨てをしなくなったんじゃが、タヌキの親子もタヌキの穴からいなくなってしまうたんじゃ。タヌキはかみさんとの約束をやぶったから、シシキ道の穴には住めないと思っただのじゃろうか。

「あの翌日は白い雪がまっておったから、とんとんと出入り口の戸をたたいたのはタヌキではなくて雪起こしの風じゃったにちがいない。あのタヌキが悪さをする筈がないわさ」

タヌキのことをギンベエさんのかみさんはいつまでもそんなふうに言うて、かばっておったもんじゃ。

三

ギンベエさんはシシキ道の竹やぶに穴を掘って住んでおったタヌキの親子が急にいなくなったのでどうしたのか気がかりじゃった。じゃが、実は何も心配はいらんことじゃった。なぜかと言えば親タヌキと二匹の子タヌキは村の神社の社殿の床下に引っこしていただけじゃったから。

なぜにタヌキが長らく住みなれたシシキ道から引つ越したのか誰もわからん。多分、かみさんとの約束をやぶってしまったのが原因じゃろうとギンベエさんは思っておった。

村の神社は深い森の中にあつて高い杉の木立に囲まれておった。神社の裏は遠くシシキ道まで続く山林じゃった。タヌキの親子はおそらくこの山林を伝つてやつて来たにちがいない。

神社の参道の手前に野菜や穀類の種を売る店があつた。消えかけた墨の字で種屋と書かれた看板が上がっておった。

ところが、ちようど、タヌキの親子が引っこして来た時にこの種屋に嫁取りがあつた。

あの時は仲人さんや家の人たちが縁側から嫁さんを見に集まった人たちに向かつて「嫁よーい、嫁よーい」とたくさんのお菓子やおもちをばらまいたもんじゃった。

タヌキの親子は夜になって草のかげに落ちて残つておった菓子やモチをひろい集めて食べた。タヌキは人間と同じように何でも食べるからう。

最初にタヌキの親子を見つけたのはこの若嫁さんじゃった。若嫁さんは、「きやつ、きやわいい」

と言つては、カボチャのところがしとか、ふかしたサツマイモなどを差し入れてくれた。

二匹の子タヌキは若嫁さんが来ると、でんぐり返りをしたりごろごろと転がったりして見せてかわいい仕草のサービスをしたもんじゃ。

若嫁さんは子タヌキがかわいくてならないが、大っぴらには出来ん。「嫁が来てから、何かと食うものがなくなる」

義母さんがいぶかしがったが、若嫁さんは見つからないようにしてタヌキの親子にこっそりと食べ物運んだもんじゃ。

「おなかの赤ちゃんが食うんじゃ。腹がへるのは仕方がなからう。食うものぐらいは大目に見てやれば良い」

義父さんはおうように言うたが、実は若嫁さんが神社の親子のタヌキに食べ物運んで行くのを見てしまったのじゃ。じゃが、義父さんは知って知らぬふりをした。

「べつに、嫁に食わすのがおいしい訳ではないが、ああも食うもんじゃるか」  
義母さんはあきれかえる。義父さんは笑う。

「ええやないか。嫁は大食いでも心のやさしい方がええ」  
朝早くから、婿さんと義父さんはんてんびん棒の前と後ろにフゴをさげて種を売りに行く。

ハンテンにモモひき、地下タビのいで立ちじゃ。

家に残った義母さんと若嫁さんは畑仕事をする。義母さんも良う働くが、若嫁さんも良う働く。

二人はばらばらと種をまく。ばらばらばらとその上に土をかける。二匹の子タヌキはそれがおもしろいらしい。神社の高い杉の木立の中でばらばらと種をまくまねをする。杉の枝に上ったりして、ばらばらと土をかけるまねをする。

日供を持って来る村人たちは時折、土や砂をかけられる。日供とは神社のお供えのことじゃから氏子が毎朝毎夕、交代でやってくるのじゃ。

「最近、神社の森では日供に行くと砂の雨がふるそうじゃ」  
「そりゃ、タヌキのしわざじゃ」

タヌキの親子はその他には何も悪さをする訳ではなかった。ばらばらばらとやるだけじゃった。じゃから、村人はさほど気にかけないでおった。昔からタヌキやキツネはお寺や神社に住むものとそうばが決まっておったらしいのでう。

やがて、嫁さんにやや児が生まれた。おぎやおぎやおぎやとやかましい。若嫁さんが深い井戸からつるべで水をくんでいる間、ずーっと泣く。タヌキの親子はそれがおもしろい。おぎやおぎやおぎやとまねをする。

それを聞いた村人は、  
「タヌキの鳴き声はおぎやおぎやおぎやと赤ちゃんのようじゃ」

と言った。

義母さんと若嫁さんは神社のそばの深い井戸からつるべで水をくむ。つるべの上のかわ車がからんころんからんころんと音を出す。からんころんと音が聞こえる間、やや児のおぎやおぎやという泣き声はやまない。若嫁さんが井戸で水をくんで畑にまく間、やや児はほっておかれるからじゃ。

その年はひどい日照りじゃった。小川の水がかれてどこの家でもつるべの音がからんころんと夕方まで聞こえたもんじゃった。水はまいても、まいてもじゅつと地面に吸い込まれ、すぐに蒸発してしまふ。夕方までかかっても、まき水は充分には行き渡らない。

義母さんは提灯をさげてまでして畑に水をやる。若嫁さんはおぎやおぎやと泣くやや児が気がかりじゃった。

「おつかさん、今日はもうこのぐらいにしましょう」

「何を言うとする。苗が枯れてもいいのか」

若嫁さんはやや児に乳をやりに行けない。

「坊やが死んでもいいんですか」

「死にやせん。やや児は泣くもんじゃ」

若嫁さんの頬に一粒、光るものがあつた。

長いてんびん棒をかついで、婿さんが帰ってきた。若嫁さんの目にいっぱいなたたえられた涙が今にもせきを切つて流れ出しそうじゃった。

「わたし、さとに帰ります」

義母さんが口をはさんだ。

「やや児はここに置いて行くんじゃぞ」

義母さんはやや児さえ置いて行けば、若嫁はすぐにもどると思うた。

若嫁さんは提灯を下げて暗い夜道を一人で帰るといふ。やや児を置いて実家に帰るしか仕方がなかったのじゃ。

タヌキの親子は心配で、心配で仕方ない。見えかくれしながら、若嫁さんを実家まで見送った。そして、若嫁さんが実家に入るのを見届けて、神社の境内にもどつた。

二日、三日と日がたつて行く。雨は降らない。若嫁さんのもどらない。

タヌキの親子はさみしい。若嫁さんがやっていたことをまねる。

夜になって人氣がなくなると、井戸のつるべを上げ下げして、かつ車をからんころんからんころんと鳴らす。やや児もつるべの音を聞くと、おぎやおぎやと泣き出す。親子のタヌキもおぎやおぎやとまねをする。高い杉の木の上から、ぱらぱらと砂を落とす。

たまらないのは種屋の人たちじゃった。タヌキは夜中でも、明け方でもからんころんやりだす。ぱらぱらぱらとやりだす。その度に、やや児がおぎやおぎやと泣きさげぶ。

からんころんからんころん、ぱらぱらぱら、おぎやおぎや、……。

これじゃとてもたまらない。

「嫁さんに頭を下げてもどつてもらおうよりしかたがないぞ」

義父さんの言葉に義母さんはふいっと横を向く。

「いいや、若嫁が頭を下げてもどるまでむかえに行く必要はない」

その翌日も夜になると、からんころんからんころん、ぱらぱらぱら、おぎやおぎや、  
・とやる。

これじゃ種屋はたまらない。

「のう、わしが頭を下げて、むかえに行く」

「勝手になさるがええ」

雨粒がぼつりと落ちて来た。ぱらぱらと降り出し、ざっーときた。一月ぶりの雨じゃった。

土砂降りの雨の中を義父さんに連れられて若嫁さんが帰ってきた。タヌキの親子は雨にぬれながら、それをそっと出むかえたもんじゃった。

雨が止んだ。草も木も生き返ったようじゃった。義母さんも、若嫁さんも、もう畑に水をまく必要はない。もう、からんころんからんころん、ぱらぱらぱら、おぎやおぎやもなくなつて、種屋も神社も静かになつた。

真ん丸お月さんが高い杉のこずえに出ておつた。ゆうらゆうらと揺れるチョウチンが神社の境内にやつて来た。若嫁さんが夜の残飯を持って来てくれたのじゃった。

二匹の子ダヌキは飛び出して、月の光の中ででんぐり返りをして見せた。

若嫁さんはその後も、

「きやつ、きやわいい」

と言つてはカボチャの煮っころがしとか、蒸かしたサツマイモなどを差し入れた。

#### 四

なだらかな山野には美しい赤松の林が丘をおおい谷をこえてえんえんと続いておつた。

ようやく一番星が見える頃じゃった。にしき雲は山向こうの太陽に照らされてあかね色に燃え、風景はそのほてつた光で黄金色にそまつておつた。ときおり、思い出したように金色の粒が降つてきたもんじゃ。

赤松の林の間から、ちらちらとうすむらさき色の火が見え始めた。うすむらさき色の炎はじよじよに丘から丘へ、谷から谷へ無数に広がってゆく。とつぷりと暮れる頃には赤松の林の中は見えかくれするうすむらさき色の火の海になつた。

キツネたちから結婚式の招待状をもらったタヌキの親子は花こう岩で出来た百畳石の上におつた。田光の百畳石をご存知じゃろう。高さは二間以上、上の広さは百畳もある大きな石じゃ。

その百畳石の前に、全身白毛におおわれたキツネの長老が現れていんぎんにあいさつした。

「今宵はわれらの結婚式においで下さり、まことに、ありがとうござる」

タヌキもいんぎんにあいさつを返した。

「ご招待にあずかり、誠に、ありがとうございます」

二匹の子ダヌキもまねて、かわいらしいあいさつした。

「招待にごじやる」

「まことにごじやる」

長老の前をこんこんとキツネの合唱隊が音楽をかなでながら通って行った。続いて、キツネの婿殿たちは口にくわえた骨の両端にうすむらさき色の鬼火をたきながら一列に並んで通り、その後で、花嫁たちが花をくわえて通って行ったんじゃ。

キツネの長老がタヌキにさかずきをすすめた。

「祝いの酒にさかなでござる。ぞんぶんに召し上がって下され」

「ご結婚式、おめでとうござる」

「ありがとうございます。先ずはいっこん召し上がれ」

「かたじけのうござる」

キツネの長老は酒だるの栓をぬき、タヌキの大きなさかずきになみなみと酒をついだもんじゃ。酒が飲めない二匹の子タヌキの方は野ネズミのムニエルなんぞをかじっておった。「われらはこうして年に一度の結婚式をいたします。春になったら、この山一帯は子ギツネたちでいっぱいになります。子ギツネたちが安心して住めるように見まもってやって下され」

タヌキは雑食じゃ。キツネの子供は野ネズミよりずっとおいしい。じゃが、そんなことは言えない。

「わかり申した。さよういたしましよろぞ」

約束させられたからにはしばらくおいしい子ギツネは食べられない。キツネたちが結婚式に招待してくれたわけがわかった。

うすむらさき色のキツネ火は赤松林の中のあちらこちらでゆらつくゆらくとゆれておった。酒好きのタヌキはすっかり酔いがまわってごきげんじゃた。

「今夜はのう。タヌキどんには大きなおみやげが用意してある。何じゃとお思いじゃ」  
キツネの長老は気をもたせるように言うた。

「そうじゃのう。酒良のコモかぶりじゃとうれしいが」

「それもあるが、もっと、良いものでござる」

タヌキはキツネたちが何かたくらんでいるのではないかとけいかいした。

「もっと、良いと言わっしゃると」

数匹のキツネが人間の男をえっちらおっちらかついでやってきた。

「ご存じじゃろう。この男」

タヌキは男の顔を見ておどろいた。

「こりゃ、ギンベエさんではござらぬか、どうしたことでもござる」

ギンベエさんはねむっておるのか、きぜつしておるのか全く動かん。

「そなた様も、ギンベエさんにはひどい目にあわされてござろうが。

ギンベエさんはそなた様にさし上げるゆえ、ぞんぶんに日ごろのうらみをお晴らしなされよ」

どうやら、キツネの嫁取りが終わったらしかった。

キツネの婿殿たちと花嫁たちが山奥に去り、キツネの合唱隊のこんこんこーんという音楽だけが残った。

音楽が終わり、楽隊がぴーひょう、どこどんと笛、たいこを鳴らした。長老もうすむらさき色のキツネ火もいっせいに消え、暗やみの百畳石の上にはタヌキの親子とだらしなくたおれているギンベエさんだけになっておった。

ギンベエさんがうゐーつと言って起き上がった。

「キツネ火はきれいじゃ。おや、もう消えてしもうたのか」

ギンベエさんはふらふらと千鳥足で歩く。止めようとするタヌキの親子を押し退けて歩く。とうとう、高さ二間ほどもある百畳石から落ちてしもうた。

落ちた所は積もった落ち葉の上じゃったが、腰骨がはずれたのか歩けんようになってしまった。めったに人が来ない山奥じゃ。夜が過ぎ朝になっても誰も助けが来なかった。

「おおーい、おおーい」

ギンベエさんは動けない。さすがのギンベエさんも泣くより手がなかった。

タヌキの親子はこの時ばかりとギンベエさんにとびかかって着ているものをはぐ。

「くっ、タヌキめ。あの時、タヌキ汁にしとけば良かった」

ギンベエさんはホゾをかんだが、もう後の祭りじゃった。

タヌキの親子はギンベエさんの上着や手ぬぐいをうばうと、ギンベエさんのそばから逃げだした。

「こら、俺の上着を返せ。手ぬぐいを返せ」

ギンベエさんが呼べど叫べど、タヌキの親子は知らんふりしてすたこらさっさと逃げて行く。

その頃、ギンベエさんのかみさんはギンベエさんが一晩中帰らなかったで心配して近所を聞き廻っておった。

「うちの人を知りませんかね」

「ああ、ギンベエさんなら、昨夜、酒良さんにござったようじゃが。帰りなさらんか」  
かみさんは隣村の酒良までさがしに出かけた。

「酒良さん、うちの人が昨夜から帰りませんのや」

「どうなさったじゃろう。昨夜はいつもより、度をこしてござったので心配をしておりますじゃが」

さがすも行っても当てがない。かみさんは心配しながら家にもどってギンベエさんの帰りを待った。昼頃になって入口に何かが来ているような気配がしたので、のぞいて見るとタヌキの親子がギンベエさんの着物をくわえて立っておった。

「おや、あの人の着物じゃないの」

タヌキの親子はギンベエさんの着物を置くと、くるつと後を向いて歩きだした。

かみさんはその着物を持って、タヌキの親子の後をどこまでも、どこまでもついて行った。とうとう、百畳石までやってきた。

ギンベエさんがかみさんを見つけた。

「何んだ。何んだ。女一人でこんな遠い所までやって来やがって。危ないじゃねえか」  
ギンベエさんはほっとすると空いばりをはじめめる。

「良かったねえ。あんた。こんな所じゃ白い骨になって、キツネ火にされてしまうところだったよ」

かみさんはその場に座り込んで、ほろほろとうれし泣きに泣いた。

「いや、昨夜のキツネ火もこいつらの仕業にちがいない。やい、タヌキ、おまえたちはあの時、タヌキ汁にしとけば良かったんじゃない」

ギンベエさんは近くの木切れを拾って、タヌキたちに投げつけようとしたが、かみさんは急いで止めた。

「何言ってるんだよ。タヌキたちがあんたの居場所を教えてくださいましたよ。ほれ、この着物を届けてくれたんでここがわかったんだよ」

「えっ、タヌキがおれの着物を届けてくれたって」

タヌキの親子はおどろいて逃げて行く。かみさんは逃げてゆくタヌキの親子の方に向か

って両掌を合わせたもんじゃないや。

丘をおおい谷をこえてえんえんと続いておった菰野の美しい赤松の林は松食い虫の被害で今じゃ見る影も無うなった。

## 五

小ナラ林の中の中が一間にも足りぬ農道にはぎつしりと落ち葉がつもっておった。その道を下肥運ばん車が行った。下肥とは肥料にするための人間のフン尿のことじゃ。化学肥料が無い時代の事じゃによって、どこでも下肥は重要なチツソ肥料として使われた。下肥運ばん車は大八車の車輪の心棒の上に荷台の代わりとしてT字形にした丸太ん棒をシーソーのように取り付けたものじゃった。丸太ん棒にはバランス良く前に三桶、後に三桶のたごが吊り下げられておった。引つ張っておるのはギンベエさんじゃった。

秋の収かくが終わって、麦をまく時期になっておった。ギンベエさんの大きな野ツボにはフン尿がなみなみと入った。やがて、野ツボのフン尿はゆったりと発酵し、黄金の液体へとじゆく成する。植物たちにとってはこの上ない美味なごちそうなのじゃ。

野ツボには家族が入った後のお風呂の湯も混ざっておった。この風呂の湯を湯どのと呼んでおった。フン尿も湯どのも大切な肥料じゃった。町まで下肥をもらいに行く農家もあった。

フン尿は体外に排出されるまでは人間の体の中にたまっておるものじゃ。フン尿がきたないと言うならばそれがたまっておる人間の体の中はどう云うことになる。じゃが、人間の体の中は汚くなくなる。と云うことになればフン尿は決して汚くはないということになる。ここまで言えば奇弁になるが、要はフン尿も食物が人間の体内で変化したものでじゃから汚い汚いとばかり云わんでくれということじゃ。

霜がおりる頃になると、ギンベエさんの野ツボからはふつふつと湯気がでる。ギンベエさんは野ツボで下肥を発酵させる名人じゃった。フン尿に住みつく細菌にも良い株と悪い株があるらしいのじゃ。ギンベエさんは良い株だけをはんしよくさせるのが得意なのじゃった。春の植えつけの頃になると、フン尿は分解して香水にも似た香りになったもんじゃ。くだいようじゃが、もう少し云わせてもらおう。フン尿も元はといえば人間の口から入ったおいしい食物であったり、飲み物であったものじゃから香りの良い、美しいものに変わってもふしぎはなからう。

さて、冬場になった。農閑期のこととて村の仲良し数人が集まって、近くの温泉に湯治に行く相談がまとまった。ギンベエさんもその一人じゃった。湯治は三、四日から一週間ほど続く。かみさんがある者はかみさんも連れて行く。湯治は米や野菜など食料を持って行き、温泉場に宿泊し自炊するのじゃった。

ところが、湯治に行く前日になって、ギンベエさんは行けなくなった。かみさんの親元の法事に出かけねばならなくなったからじゃった。

「法事は一人で行きますから、あんたは湯治に行きなされ」

かみさんはそう言ってくれるが、ギンベエさんは炊事がまるつきり出来ないのです、かみさんがいっしょに行ってくれないと困るのじゃった。

「義理を欠かす訳にゃいかん」

ギンベエさんは温泉に行きたくて仕方がなかったが、しぶしぶかみさんの親元の法事に行くことにした。

その日は朝から、ちらちらと小雪が降っておったが、ギンベエさんの仲良したちは信州の温泉に湯治にでかけていった。ギンベエさんはそれを見送った後、かみさんと法事にかけた。

かみさんの親元はギンベエさんが温泉旅行までキャンセルして法事に来てくれたので、おおいによろこんで歓待してくれた。

「そうですかい、そんなにまでして来てくださったのかい。まあ、どんどんやっておくんなさい」

ギンベエさんはよってすっかり上きげんになった。

「あんたはゆっくりしておいなされ。私はちよつと先にもどりますでな」

かみさんはギンベエさんを自分の親元に置いて、先にもどっていった。

「もつと、ゆっくりしていきなされ。たった一里じゃ。チョウチンをさげて行けばなんと言うこともない」



「だいぶ、積もってきましたしな。それにこんな日にはタヌキの奴がいたづらしますんでなあ」

ギンベエさんはごちそうの入った引き出物をぶら下げて、日暮れ前の野道をぞうり雪をふみながら帰っていった。

「雪やこんこん、アラレやこんこんか。また、降ってきやがった。今夜は積もるぞ。それにしても今頃、湯治に行った連中は温泉に入って雪見酒じゃろな」

はおっぺおるミノも雪で白うなってきた。一杯きげんで歩いているので寒さは感じない。むしろ、暑いぐらいじゃった。

ギンベエさんはちようど、自分の野ツボのあるあぜ道に来たとき、ぐうぜんにもタヌキの親子に出会ってしまった。

「あつ、タヌキめ、俺は化かされはせんぞ」

ギンベエさんはタヌキに向かって大声を出した。何だか今日は化かされそうな気がしていたので化かされまいとしたのじゃった。じゃが、それがかえっていけなかった。タヌキの光る丸い目を見ると、もうたまらない。タヌキがきれいな湯女に見えてしまった。

「あらつ、お客さんは法事とかで来れないって聞きましたけど」

湯女はたすきがけをした白い二の腕を見せた。

「おうつ、法事は終わった。ぬくぬくと湯気が出てあつたかそんな温泉じゃのう。こんなところに温泉などあつたかな」

ギンベエさんは首をかしげた。

「そりやもう、あつ、温泉にお入りになるなら、ごちそうの入った引き出物はこちらに預かります」

湯女はギンベエさんの持ち物を受け取った。

「そうかい。じゃ、ひと風呂浴びさせてもらうことにするか。雪見風呂も良いもんじゃのう」

ギンベエさんは着物をぬいで丸はだかになると、湯気が出る野ツボに入ってしまった。

「じゃ、ごゆるりとどうぞ」

湯女は法事の引き出物を持って消えてしまった。ギンベエさんはそれに気づかない。

「酒はぞんぶん吞ませてもろうたし、温泉はぬくぬくとあつたけえ。

坂はあり、照る照るうく、鈴鹿はあ曇るつと、・・・」

ふわふわと小雪がまう中で、ギンベエさんは野ツボにつかって、きげん良う唄なんぞを歌っておった。ギンベエさんの歌声が白くうす化粧した野山を流れていった。

ギンベエさんのかみさんは聞きなれた声が北風に乗って遠くから聞こえてくるような気がした。まさか、と思いつながら、小雪がまう夕ぐれの外に出た。確かに聞こえて来る。かみさんは声に向かった歩いた。ギンベエさんの馬子唄はますます、さえわたっていった。

「あんた、何をしてるの」

かみさんがぜつきょうした。

「おお、おまえか。一緒に入れ。良いお湯だ」

ジャコウのような匂いになるのは少し先のことなので、野ツポに入っておるギンベエさんの体から湯気と一緒に立ちのぼるにおいはまあ臭い。

ギンベエさんは一つ大きなくしゃみをした。

「おまえ、こんなところで何をしておる」

「あんたこそ、何をしておられるのじゃ」

ギンベエさんは自分が野ツポに入っていることに気づいて、丸裸のまま野ツポから飛び出した。その勢いで野ツポから飛び散ったフン尿が枯れ草に積もった雪を黄色く染めた。

かみさんは雪をすくい集めてギンベエさんの頭からかけた。

「こつ、こら、何をする」

「あんた、早く体を何とかして下され。臭そうてたまらん」

近くの小川はかかっている。仕方なく、ギンベエさんは丸裸のままかけ出した。

「あんた、待って下され」

かみさんがギンベエさんの着物をひろって追いかける。雪はますます激しうなつてギンベエさんの体に降りかかる。ギンベエさんが小ナラ林の中をぬけて家に帰り着いた頃には降りかかった雪がとけてギンベエさんの丸裸はきれいに洗われておった。

真つ赤になったギンベエさんの丸裸から、ぼつぼつと湯気が出ておった。

「おい、冷たい水をかけてくれ」

かみさんはギンベエさんの体に井戸水をくんできてかけた。

「まだ、臭い」

かみさんはそう言ってギンベエさんの丸裸を手ぬぐいでふいた。

翌日、引き出物のうつわだけギンベエさんの家の前においてあったそうな。

仲良したちが湯治から帰ってきた。

「ギンベエさん、何か良ことでもあったかな。湯治にいったわしらより、ずっと若返ったようじゃ」

ギンベエさんはいつもより元気で、肌が若々しくつやつやしておった。ネズミの尿やウグイスのフンより、ギンベエさんの野ツポの方がずっと効いてきれいになったそうじゃ。

フンの中にはタンパク質やアミノ酸、ビタミンやミネラル、ホルモンまでふくまれておるし、尿の中にはひふの保水成分の尿素が含まれておる。これらはさらに野ツポの中で発酵して、ひふや粘まくから吸収されやすい小さな分子に分解されておるのう。

じゃが、それはギンベエさんの野ツポでのことじゃから、まねをなされても必ずしも効くと保証はできませんぞ。

つこうから子供の数までいっしょじゃった。たよりになるのは遠い親せきより近い他人と云うが、何事もよいして仲良うくらししておった。

「サクベエさん、一度山をこえて夫婦で一緒にお多賀さんにお参りに行こまいか」

「うん。お多賀さんなら朝早う出れば夕方には帰られる。子供も手がはなれた事じゃ。久しぶりにお参りするかのう」

お多賀さんは北勢地方では八風街道を西へ向かい山ごえして行くのがふつうじゃった。ゴサクさんが言うように行きが半日、帰りが半日の道のりじゃった。電車もバスもない時代じゃ。足だけがたよりじゃった。

二軒の夫婦はお多賀さんの祭礼の日をえらんで朝早く家を出た。空は良く晴れておった。半時（一時間）もするとサクベエさんのかみさんが音を上げた。

「きつい坂道を登って来たんでつかれてしもた。ちよつと、休ませておくんなされ」

サクベエさんがふり向いた。

「きつい坂道はこれがさいごじゃ。それじゃ、ちよつと休んでゆくか」

皆が休んでいる間にサクベエさんのかみさんは小用を足しにササ原に入った。

「のう、お前さん。若い鹿が二匹もたおれておる」

サクベエさんのかみさんはササ原から出てくるなりそう言った。

「どれ、どんな鹿じゃ。助かるものなら手当をしてやろう。何にやられたんじやろう」

サクベエさんたちはササ原に入ってたおれておった鹿を助けてやった。それから、かみ

さんたちをばげましてまた出かけた。

街道とは云え雑木やササが生い茂る山道は狭もうて一列で通らねばならん。先頭がサクベエさんで、その後にサクベエさんのかみさん、ゴサクさんのかみさん、そして最後がゴサクさんじゃった。

往きは天気が良いてちよつど昼頃にお多賀さんに着いた。祭礼の日とて、えらいにぎわいじゃった。二軒の夫婦は無事にお多賀さんにおまいりし、門前町で食事などして帰路についた。

とちゆう、永源寺で休けいしていると、杉谷の円導寺に住んでおるといってお坊さんに出会った。

「これから先はヤマンバが出るそうじゃ。鹿や猪はもちろんのこと人もねらう。気をつけて帰られよ」

皆は永源寺でも、思い思いにみやげ物を買った。サクベエさんはトックリに入った酒、ゴサクさんはクルミセンベイ、ゴサクさんのかみさんとサクベエさんのかみさんはそれぞれ木目こみ人形じゃった。その頃から空もようが怪しゆうなってきた。

帰り道は先頭がゴサクさんで、その後に、ゴサクさんのかみさん、サクベエさんのかみさん、そして最後がサクベエさんの順じゃった。ゴサクさんがかみさんをふり返った。

「降って来ねばよいがのう」

ゴサクさんのかみさんはゴサクさんの背中をちよつと押しして足を速めた。

「急ぎましようぞ」

八風峠近くまで来た時じゃった。サクベエさんのかみさんがふり向いた。

「なあ、あんた。小用がしとうなった」

サクベエさんのかみさんは小用が近い。

「良いとも、まってるから川の向こうで用足しをしてくるがええ」

サクベエさんのかみさんはその場に荷物をおくとササを押し分けて道のわきを流れる小川の中の石の上をとんとんとわたって行ったんじゃ。

しばらくしてゴサクさんのかみさんが首をかしげた

「おハナさん、おそいのう。どうしたんじやろう」

「おかしいな。あいつの小用は短いんじやが」

「わたしが見てきましようかの」

「いやいや、その内にもどるじやろう。ゴサクさん、立ちん坊して待つのも何じや。すわって休けいしたらどうじやろう」

「お二人は休けいしとっておくんなされ。あまりにおそいので心配じや。それに 雨がふってくるど困るでわたしが見てきます」

「おマツさん、そいじやすまん。何ぞあつたら大声を出してください」

サクベエさんは近くの石に腰を下ろすと、永源寺で土産に買ったトツクリのセンをぬいた。

「サクベエさん、重いものをせっかくここまで持ってきたんじや。家まで持って帰りなされ」

「何の、家で飲むも、ここで飲むも同じことじや。この徳利は大きいのでけっこう重い。少し軽くせんとな。さあさ、まあ一杯やって下され」

サクベエさんとゴサクさんがちびちびとやっておると、ササのしげみをかき分けてマツさんがハナさんの手を引っ張って出てきた。

「おハナさんったら、気持ちが悪うなつたつて、座り込んでおつた。サクベエさん、お目出たかも知れませんか」

「ハナ、本当にそうか」

「まんだ、わからん。昼のmamshにでも当たつたのかも知れん」

「琵琶湖のmamshは名物じや。あたるということとはななろう。第一、わしらは何ともない」  
ウナギのことをmamshとも云うた。

「ではカエルじやろうか」

「おハナ、何を言うとする。昼はウナギの井じゃつたらう」

「そうじゃった」

二軒の夫婦が自分の家に着いたころにはとつぷりくれておつた。夕飯のしたくやらお風呂の用意は子供たちがしておいてくれた。サクベエさんはみやげに買ってきたトツクリの残り酒をちびりちびりとやりはじめた。

「ハナ、おマツさんが言うたことほんとうか」

「おマツさんが言うたこと。ああ、つわりかも知れんと言うことかいな」

「そう言えば腹が急に大きくなったのう」

「いやだ、あんた。じろじろ見ないでくれろ」

「もう、合間があるんで産まれんかと思っておったがのう」

「やや児はさずかりものじゃ。いつ出るかわからん」

ゴサクさんの家でも同じようなことを言っておった。

「おまえの方はどうじゃ」

「何の事ってす」

「おハナさんのお腹のことじゃ」

「あんた、おハナさんがお目出たかも知れませんがサクベエさんに言うたのは、あれはじょうだんですがな」

「いや、あの大きな腹には子供がおるに違いない。それにあの表情と目つきじゃ。いつもと違うと思わんか」

「わたしらの年ではもうやや児が産まれる気づかいはない」

そんなことがあってから一週間がすぎた。やっぱり夕食時じゃった。

「マツ、やっぱりおまえも腹が大きい。うちとサクベエさん所はいつも同じに 子が産まれたやないか。今度もそんな気がする」

「自腹じゃ、これは」

マツさんもハナさんと同じように大きな腹をしておった。もつとも、おばさん方は現在でも大方そうじゃけどな。

用事でサクベエさんの家に出かけたゴサクさんがもどってきた。

「マツ、おハナさんがどこかに行つてもうて居らんそうじゃ」

「あんた、おとなりの女房のことなんかよろしいですがな」

「何を言っておる。おハナさんが化け物にでもたぶらかされておつたらどうするのじゃ」

「それじゃわたしがおハナさんをさがして来ますでな。多少、帰りがおそくなるかも知れませんがな」

「そうか。それではそうしてくじゃれ」

マツさんが家を出るとハナさんが家に帰り、今度はマツさんが行方不明になったんじゃ。

「ハナ、おマツさんはおまえをさがしに行つたまま帰らんそうじゃ。放つてはおけまい。さがしに行つてくる」

「おマツさんはよその女房じゃ。あんたがさがしに行くのはおかしい。わたしが 行きましょに」

「そうか。それではそうしてくじゃれ」

ハナさんがマツさんをさがしに出るとマツさんが家に帰り、ハナさんが行方不明になったんじゃ。交互に行方不明になるとはおかしな事があつたもんじゃった。今度はゴサクさ

んが不思議に思っていて、自分のかみさんのマツさんの後をつけたのじゃった。

するとどうじゃ、マツさんはハナさんをさがしにどんだん山の中に入って行くではないか。そして古いほこらの前に立ったのじゃった。マツさんはゴサクさんが見ているとも知らず、自分の顔の皮をべりつとめくつたのじゃった。マツさんの顔は口が耳まで裂けたヤマンバになっておつた。そして、ほこらの中からハナさんの面の皮を取り出してかぶり、服をかえるとヤマンバはハナさんになってしまった。ヤマンバは一人二役をやっておつたのじゃ。

ゴサクさんはあまりのことに身がこおって声も出なかった。

ハナさんになったヤマンバはなに食わぬ顔で家にもどつた。それとは知らぬサクベエさんはさすがにおこつた。

「ハナ、おまえどこに行っておつたのじゃ。おマツさんがおまえをさがしに行ってくれたのじゃぞ」

「わたしはおマツさんをさがしに行っていましたのや」

その時、ゴサクさんがやって来たのじゃった。

「今度はマツがもどらんじゃ。おハナさん、あんたはどこへ行っておつたんじや」

「おマツさんをさがしに行っておつた」

「俺らは見たぞ。おマツは三斗山の古いほこらじゃ」

ゴサクさんの目はつり上がっておつたが、ハナさんに化けたヤマンバはとぼけた顔をし

ておつた。

「三斗山の古いほこらへのう、おマツさんはあんな所へ何をしに行かれたのじやるか」

たまりかねたゴサクさんはハナさんにとびかかった。

「このヤマンバめ、しらばくれるな」

「あれっ、何をなさる。ゴサクさん、気でも狂われたか」

「いいや、マツもおハナさんも喰われてしもうて、おまえのこの大きな腹の中じゃ。面の皮、はがしてやる」

「おい、わしのハナに何をする」

サクベエさんが止めに入ったが、ゴサクさんはかまわずその顔をつかんで引つ張つた。

するとどうじゃ、ハナさんの面の皮が剥がれて、その下からヤマンバの顔があらわれたのじゃった。

「ゴサクめ、よくも見やぶつたな」

ヤマンバは怖ろしいぎょうそうになり、血相変えるととび出していった。

お多賀さんに行く途中で助けてやった二匹の雌鹿が杉谷円導寺のお坊さんを連れてやって来た。先に永源寺で出会ったお坊さんじゃ。

「この雌鹿たちに聞いたのじやが、そなたたちのかみさんもヤマンバにおそわれたそうじやの」

サクベエさんは事の次第を話した。

「ヤマンバが住んで居るのは三斗山じゃったか。わしが行って追ひ払ってやろう」  
お坊さんは三斗山の古いほころの前で経を読み、呪文を唱えた。そしたら、穴の中から背中に口があるヤマンバが飛び出してきたそうじゃ。背中に口がある訳がないが、耳まで大きく裂けておったのでその様に見えたのじゃろう。  
「せつかく人の魂を食べて人間に戻ろうとしておったものを、よくもじゃまをしてくれたな」

ヤマンバはそう言うとき大きな小ナラや赤松の枝にぶら下がりながら飛んでいった。  
「ヤマンバにおそわれたそなたたちのかみさんがふびんじゃ。呼び戻してやろう」

お坊さんはまずおハナさんの面の皮を永源寺で買って来た木目こみ人形にかむらせた。次に三斗山のほころへ行っておマツさんの面の皮を持ってきてもう一つの木目こみ人形にかむらせた。それからお坊さんは二体の木目こみ人形に向かつて経を読み、呪文を唱えた。そしたらどうじゃ。二体の木目こみ人形は見る見る人間になり、おマツさんとおハナさんになった。

「お坊さま、ありがとうございます」

おマツさんとおハナさんは声をそろえてそうを言うた。

お坊さんはお釈迦様が生まれたブツダカヤで修行をなされ、神通力を持った杉谷善住坊というお方じゃった。

## 七

じいっじいっつと鳴くのはアブラゼミじゃ。しゃわしゃわとかましいのはクマゼミじゃ。夏の初めに鳴くにいにいぜミの声はもう聞こえんわい。かなかなというヒグラシの澄んだ声のアブラゼミやいにいぜミの中にまじり始めた。もう夏も終わりに近いと云うことじゃ。

「おいつ、川がかれたぞ」

ガキ大将の声に、あちらこちらの木戸から子供たちが飛び出して来る。男の子はもちろんじゃが女の子もおる。それぞれに、箕やら、オケやら思い思いの物を持って出て来たんじゃ。川がかれるとドジョウ、ユブナ、ナマズ、モロコなどたくさん魚が取れるんじゃ。子供たちは川の中にとび込んでいった。

「見ろっ、大きなあかねだ」

この地方であかねと呼んでおったのはオイカワのことじゃ。わずかな流れの中で五寸程もあるオイカワがはねておったのじゃ。オイカワは産卵の時期をむかえて雄の体がきれいな色になっておった。

「この石をどけるんや」

やや遅れてさかのぼっておった男の子たちは大きな石の下の水たまりにかくれておる魚を捕まえておった。

「どけどけ、ヤツメウナギや」

ガキ大将は仲間を押しつけてヤツメウナギをさがしておる。ヤツメウナギは精がつくと云うて親が喜ぶんじや。

「あつ、カニを捕まえたわ」

女の子たちはたわいも無く沢ガニやメダカをつかまえておった。

五、六人ほどにもなった先頭の子供たちは土橋の下をくぐって、どんどんと上流へいった。川幅がだんだんとせまくなり、勾配が急になった。

先頭の子供たちが立ち止まった。

「おい、でっかい魚が逃げたぞ。その石の下や」

大きな石の下に手をつっこんだり、棒切れの先を入れてついたりしておった。

おくれておった女の子たちが追いついてきた。

「ねえ、もうもどろろよ」

後ろの方にいた小さな女の子が不安そうな声を出した。

「ここまで来たら、ため池はもうすぐや。」

山の中のため池がかれておったら、コイやフナがどっさりとれるぞ」

子供たちは夢中になって、かれた川底を上って行く。右に左に曲がった川の中では先が見えない。

大きな石がごろごろした所に来た時じゃった。突然、目の前に老婆が現れた。先頭を行

くガキ大将が棒立ちになった。

「あつ、ヤマンバや」

老婆と言うても背筋はしゃんと伸びて大きな体しておった。ただ、顔付きが異常なじゃった。口は耳の近くまでさけて、鼻はのっぺらぼうになって、ほおはケロイドのようになってそげておった。

「わしはヤマンバなんかやない。川がかれたのう。おまえたちと同じように魚をひろって歩いとるのじゃ」

老婆はそう言って、さけた口でにやつと笑ろうた。

「くっ、くわれる」

ガキ大将の後ろにいた小柄な男の子が叫んだ。それと同時に、子供たちはきびすを返して、我先にと今来た方へかけだした。女の子たちは恐ろしさのあまり泣き出した。足ががくがくしてうまく走れないのじゃった。

「これっ、待たんか。転んでケガをしたらどうする。待て、待て」

老婆は追ってくる。

「助けてくれっ、ヤマンバにつかまる」

子供たちは夢中で逃げる。一人の女の子が大きな石と大きな石の間に片足を突っ込んで動けなくなつた。

「ねえっ、待ってよ」



子供たちは転んだその女の子を置いたまま逃げて行った。

女の子は恐怖のために泣き声も出なかった。老婆はゆっくりと女の子に近づいた。

「大きな石には魚の餌になるコケが生えておるんですべりやすいんじや」

女の子は石の間から足を抜こうとひっしじやった。

「来ないで。近づかないで」

老婆はおかまいなしに女の子に近づいた。

「はいているゾウリをおぬぎ。もつと、足から力を抜くんじや」

老婆は女の子の足を持って、そつと抜いた。女の子は立ち上がって逃げようとしたが、抜いた足に力が入らない。

女の子はしくしく泣くより仕方がなかった。もう、ヤマンバにくわれてしまうとと思ったのじや。

老婆は女の子の足を持った。

「おれておるな。手当をせにやららん。さあ、おぶつてあげるぞ」

老婆はゆっくりとしゃがんで女の子をせおうと、川を上り始めた。

子供たちは女の子を残したまま、かれた川の中をころげるように逃げ下った。

土橋の所まで来ると、やっと村人に出会った。

がき大将は大声を出した。

「ヤマンバが追っかけて来る」

普通なら笑って通り過ぎるが、今は子供たちの様子がちよつとちがう。

「みんなあわてて、どうした」

「ハナちゃんがヤマンバにつかまった」

ほつとしたのか、がき大将が大声で泣き出した。他の子供たちもそれにならつたので泣き声の大合唱が始まった。

「まあ、はじめからちゃんと話してみろ」

村人は半信半疑で子供の話を聞いた。ガキ大将はしゃくり上げ、しゃくり上げしながら要点を話した。

一方、山奥の炭焼き小屋に着いた老婆はハナちゃんを小屋に入れて、折れた足に薬草をぬつてそえ木をあてた。

「二、三日は動かしちゃならんぞ」

老婆は炭焼き小屋の中で火を起こし、かまに湯をわかし始めた。

ハナちゃんはヤマンバが上手なことを言つて、やがて、自分をにて食うにちがないと思つた。

「帰る。家に帰る」

「無理を言うものじやないよ」

いがないことに、老婆はわかしたお湯で山芋をにて食わせてくれた。

「ねえ、お婆さんはヤマンバなんでしょ」

老婆は笑い出した。

「ヤマンバなんて、この世の中にいやしないよ」

「でも、お婆さんはずっと山の中に住んでるんでしょう」

「病気で、こんな顔になってしまったからね」

「山の中で何をしているの」

「リスやサル、それに小鳥たちとお話しているよ」

動物たちと話が出来るなんて、やっぱり、このお婆さんはヤマンバなんだと、ハナちゃんは思った。

夕方になっても、ハナちゃんは村に帰らない。ハナちゃんの両親はもちろんのことじゃったが、村人たちも心配になりはじめた。

「本当に、ヤマンバにさらわれたんじやろうか」

子供たちは村人たちに自分たちが見たヤマンバの説明をした。

「うん、確かにヤマンバだった。口は耳の近くまでさけて、鼻はのっぺらぼうになって、ほおはそげておった」

村人たちは山を捜さくすることになり、それぞれに松明を持って山に向かった。老婆は近づいて来るたくさんのタイマツの灯を見た。

「こらっ、ヤマンバ、子供を返せ」

村人たちはそれぞれにオノや山刀を持っておった。老婆は自分を捕まえに来る村人たち

がこわくなった。

「さあ、逃げるのじゃ」

老婆は手荷物をまとめるとハナちゃんをせおった。細い月の明かりをたよりに、高い山をこえて逃げていった。

村人の必死の捜さくにもかかわらずハナちゃんは見つからない。

それから、十日程もたって、両親も村人もあきらめかけておった頃じゃった。ひよっこりと、ハナちゃんが片足を引きずりながら帰った来たのじゃった。

「あのお婆さん、ヤマンバなんかじゃなかったよ。やさしいお婆さんだった」

子供たちはハナちゃんの言うことが信じられない。

「ヤマンバに食われてしまったんじやなかったの」

「ほら、お別れにお花をもらった」

ハナちゃんは山中に秋の訪れをつけて咲くシュウメイ菊の花たばを持っておった。

## 八

長者は冬至の夜にふしぎな夢を見たそうじゃ。

「ワラワは雪姫と申すものじゃ。雪がふる大寒の日の夜に、雪人形をつくりて床の間に飾り、茶わん一杯の白メシ、一盛の花モチ、小皿一杯のシロ豆、たかつき一杯の白ゴマを供

えよ。白酒も忘れずにな。さすれば、今年も政所の村は豊作になろう」

雪姫はそう言つて、その夢の中にきえた。

翌日、長者は朝から何となくぼんやりしておつた。いつもとちがう長者のようすに、妻女は心配になった。

「何ぞ、心を痛めることでも出来なすつたか」

長者の目はなおも空ろじやつた。

「雪姫をまつらねばならぬ」

妻女は長者がまだ夢の中にいるのではないかと思うた。

「何、雪姫じゃとな。それはどなたのことじゃ」

長者は軽いため息をついた。

「どなたかはわからぬが、それは美しい女子じやつた」

妻女は笑いながら、長者のわき腹をぎゅつとつねつた。

「まあ、この人つたら」

「いたつ、いたい」

やつと、長者はわれに返つた。

大寒の前日の夜が来た。長者はまたもやふしぎな夢を見た。

「冬至の夜に、ワラワの言うたこと、覚えていやるか。」

明日はお昼頃から、雪がふり始めようぞ。さらさら、さらさらとふりつもる。

じやによつて、雪人形を作り、お供えをして、ワラワをまつつて下されや。

まつらなかつたら、よいな、そなたはこごえ死ぬ」

雪姫の冷たい手が眠っている長者のほおをすつとなでた。

翌朝、またもや、ぼんやりしている長者を見て、妻女は心配になった。

「どうなすつた。顔色がお悪い」

長者のほおが軽くけいれんした。

「今夜は雪姫をまつらねばならぬ」

妻女はもう笑わなかつた。

「おまつりしましょうぞ。あんた様に何ぞたたりでもあると困る」

妻女はさつそく、もちつきの用意をし、米をとぎ、大豆を水にひたした。長者はワラをしんにしてして雪人形を作つた。

雪は降り止まず、夜になるころにはひぎをこす深さになった。長者は女中から、小者にいたるまで、家中のものを座敷に集めた。

雪人形は五寸ローソクに左右から照らされて白く浮き立っている。部屋のすみずみにあつるしよく台の灯がかすかにゆれておつた。

長者はとりあえず、雪人形に向かつて深々と礼をした。雪人形は仏さまでも、神さまでもない。どうおがめばよいかわからないのじやつた。

その時、雪人形の周囲がスノウダストに包まれたかのようにきらきらかがやき始めた。

「ワラワは雪姫じゃ。長者殿、たいぎであつたのう」

雪人形はこの世のものとも思われぬほど美しい娘の姿に変わっておつた。

長者の妻女は思わず両手の平を合わせた。

「ああ、もつたいなや」

家中の者は妻女にならつて両手の平を合わせた。

雪姫はご飯を一はし、ふつくらと柔らかな花もちを一かけら、白いにまめを二、三粒、いった白ゴマを少々口に入れてほほ笑んだ。

「美味じゃ。お礼に一さし舞ってしんぜよう」

雪姫が立ち上がると、あたりは天上からふりそそいで来るえもいわれぬ音曲につつまれた。光を放っているような雪姫の真つ白なふり袖が羽衣のように空間に舞った。

《ユズリハの、スエは栄えん、ユズリハの、……》

雪姫は一さし舞い終わると、それぞれに白酒をついでまわつた。

「長寿の酒にござります。どうぞ、長生きなされませ」

雪姫は長者と妻女には二杯目、三杯目をついだ。

「雪姫殿にちようだいたした白酒はこりやあ何じゃ。これこそまさにかんろじゃ」

雪姫はさらに一さし舞つた。家中のものは再び、息をするのも忘れたかのように、雪姫の唄に聞き入り舞に見入る。

雪姫が床の間に座つた。何と、雪姫はそのまま元の雪人形にもどつておつた。

妻女がわれに返つた。

「ひとときの法楽じゃつた」

家中のものはおも余いんにひたつてだまつておつた。

長者の家のできごととはあつと言う間に世間に知れわたつた。

それを聞いた領主はぜひとも自分の目で雪姫の舞いが見たいと思つた。さつそく、長者を城に呼びよせた。

「どのようにすれば、雪姫を呼ぶことができるのじゃ」

長者は顔を上げて、脇そくにもたれておる領主のあぶらぎつた顔を見た。

「大寒中に、雪人形をつくつて床の間にかざり、白メシ、白い花モチ、白豆、白ゴマ、白酒をお供えするのでござります」

「わかつた。そうじゃ、早くせねば大寒が明ける」

「今夜はこの分では大雪でござりましょう」

領主は長者が帰つた後で、家老を呼んだ。

「今から、雪姫を呼ぶ準備をいたせ。」

そうじゃ。播磨より取り寄せた真つ白な塩もある」

家老は塩、米、モチ、豆、ゴマ、白酒を床の間の雪人形の前に供えた。

長者が家に帰り着いたころには、雪は寸尺先も見えぬほど激しくふつておつた。

城の奥座敷では領主が一人、床の間に向かつてすわつておつた。百貫ロウソクが雪人形

を照らしている。やがて、雪人形がスノウダストにつつまれてきらきらと輝き始めると、そこに雪姫があらわれた。

「ワラワは雪姫じゃ。今宵はそなた一人でワラワを呼んだのか」

「おお、雪姫、よくぞ来た。こよいは美しいそなたと二人つきりじゃ。皆のものは下からせてある」

「ワラワの好物は白いご飯に、つきたての花モチ、炊き立ての豆、いりたてのゴマじゃ。じゃが、これは白米、かたい切りモチ、生大豆、生ゴマではないか。こんな物、そなたでも食えまい」

雪姫はおこって、お供え物をぶちまけた。

「これはまた気のつかぬことであつた」

雪姫はきげんがわるい。

「塩はきらいじゃ。すぐに捨てよ」

雪姫の言うままに、領主は戸の外に塩をまきすてた。塩がかかった所は雪がとけて地面が見えた。

「さあて、これで供えたものがすべて台なしになった」

「よい、白酒があるではないか」

雪姫は領主の盃に白酒を注いだ。領主は雪姫のきげんがなおつたのかと思うた。

「そなたの舞いをしよもうしたい」

雪姫は立ち上がると、しずしずと舞い始めた。

《ユズリハの、スエはさかえん、ユズリハの、……》

領主は雪姫がついだ盃をかたむけておつた。

「ユズリハか。どこかで聞いたような曲」

雪姫は舞いながら、領主を見下ろした。

「ワラワを見忘れたかや」

領主ははつと盃を手ばなして、雪姫の赤い目を見た。

雪姫は舞いを繰り返す。

《ユズリハの、スエはさかえん、……》

「おお、そなたはもしかして、ほろび去つたユズリハの。

ユズリハ城の姫」

「ワラワはこよいを一日千秋の思いでまつた。

わがユズリハの一族をだましようちにしてほろぼしたのはそなた」

雪姫は氷で出来た剣をすらりとぬいて、領主の目の前につきだした。領主は酔いが回つてろれつが回らない。

「まつ、待ってくれ」

領主はがたがたと雨戸を開けて、雪の庭に飛び出した。

雪姫はふわりと、雪の庭におりた。

「逃げてもむだじゃ。わが一族の積年のうらみ、はらしてくりようぞ」

「誰か、助けてくりやれっ」

雪をかむって家も眠り、木も眠り、石も眠っておった。誰も気づかなんだ。

雪姫はにやりと笑ろうた。

翌朝、家老はのどをツララで突きぬかれて軒先にたおれている領主を見つけた。

「さても、ご領主は昨夜、酒に酔われて庭にでも出ようとなされたか」

かやぶきの屋根からは何本も尖った太いツララが下がっておった。

## 九

大山にまっ赤な大きな鼻の大テングが移り住んできたのじゃった。何でも都の北にある鞍馬山に住んでおったテングじゃったそうな。

ふつう、テングは樹齢百年をこすような松や杉の木の上に住んでおったから下から見上げてもめったに見ることはできなんだ。ところが、この大テングは鉄の一枚歯の下駄をがらんがらんとならして村里まで下りてきたんじゃった。それだけなら良いのじゃったが、この大テング、大きなうちわを振りまわしては大風をまきおこしたんじゃ。稲はたおれるし、わらぶき屋根は吹つとぶし、村人は困りはてておった。

「どうすりや、ええかのう」

「大テングは神通力を持っておる。お供えをしてあげられぬようにお願いをするより、しかたがなかるう」

相談がまとまり村役の衆はたんまりとお供えを背にのせた牛をひきつれて大テングの住む大山に出かけたのじゃ。

「大テングさま、月に一度必ずお供えを持ってまいりますから、これからはどうぞ、村には下りておいでにならぬようお願い申します」

村役の衆は大山で一番古い杉の木の前に来てお願いをしたのじゃった。

「村の者共、それは大義じゃった。じゃが、それだけではたりぬ。娘を一人つれてくるのじゃ。わしの身の回りの世話をさせるためにな」

村役の衆は村にもどって相談したが誰の娘を大テングにさしだすか決まらなんだ。そしてたらまたぞろこの大テングが村に下りてきたんじゃ。

「大テングさま、都にはきりよう良しの娘たちがたんとおるかも知れませぬが、田舎には大テングさまのおめがねにかなうような娘はおりませぬ。よってお連れするわけにはまいりませなんだ」

ところがその時、村一番のきりよう良しとひょうばんのお志乃という娘がやって来たのじゃった。

「おお、おまえは何ときりよう良しの娘じゃ。おまえのようなきりよう良しの娘は都にもめったにおらぬ。連れてまいるぞ」

その娘はたまたま大テングにであってしまったのが運のつきじゃった。大テングに手をつかまれて大山で一番高い杉の木の上までつれていってしまったのじゃった。

「一人娘のお志乃を返してください」

娘の両親は大山で一番高い杉の前まで来て大テングにひざまづいてたのんだんじゃ。

「お志乃はわしがもらった。あきらめて帰れ」

杉の木の上からは一人娘のお志乃のすすり泣きの声が聞こえておった。

そこを通りがかったのが鉄砲を持ったお坊さんじゃった。

「大テング、このようにご両親がお願いしておるのが聞こえぬか。聞こえねばこの大鉄砲でそなたをうち落としてやるがよいか」

すると大テングの声がした。

「わしの体に生臭坊主の鉄砲の弾などあたるもんか」

それは大山で一番高い杉の木じゃったから大テングの住む所は天にもとくほどの高さじゃった。とても鉄砲の弾が届くとは思われなんだ。

「わたしはブツダカヤで修行をいたし数々の法力を得た杉谷善住坊と申す者じゃ。また、この鉄砲はスペインと云う国の王が持っていたという二ツ玉の鉄砲じゃ。わたしの法力とこの二ツ玉の鉄砲を使えば必ずそなたをうつことが出来る。娘を返さねば本当にうつが良いか」

「はっはっは、坊主のたわごとなど真に受けるもんか。うてるものならうつてみよ」

お坊さんもそこまで言われれば鉄砲をうたざるを得なくなつたんじゃ。じゃが、娘の親は弾が届くにしても大テングでなくて娘に当たったらどうしようかと気をもんだのじゃった。

「わしらの娘にあたって、娘が死ぬるようなことになっては困ります」

「心配いたすな。わたしの二ツ玉の鉄砲は百発百中じゃ。大テングの鼻っ柱を折ってこらしめてやろう」

お坊さんは大山で一番高い杉の木の上目がけて鉄砲を放つたんじゃった。鉄砲の弾は見事に大テングの鼻をうち落とした。鼻っ柱をうち落とされた大テングは低くなつた鼻を押さえて西の方に飛んでいった。すると、娘が空からふわつとふるように落ちてきたんじゃった。

お坊さんは娘を両腕で受け止めなされたんじゃった。このお坊さまがまたまたうつくしいお方でな。娘は命を助けてくれたお坊さんが好きになつてしもうたのじゃが、お坊さまは妻をめとれぬ。そのままどこかに行つてしまわれたそうじゃ。

それから大テングの鼻がおちてきたあたりにはテングダケがいつぱいはえるようになったげな。

森林の杉は天をつくようにのびておった。百年も前にご先祖が植えたもんで、杉谷の在のものたちのほこりじゃった。それにりんせつして、これも立派な赤松林があった。福松の在のご先祖が百年も前に植えたものじゃった。今で云うと、尾高の南の辺りじゃろうかのう。

太い赤松は風を受けてさわさわーと白い雲を空のすみにはき寄せておった。高い杉の木の方はたっぷりと青絵具をつけた絵筆で、赤松がはいた白い雲のあとを真っ青にぬっていった。

杉林と松林のさかい目で杉谷の若者と福松の若者がぼったり出おうた。さかい目の真ん中あたりに巨岩がある。二人はその岩によじ登って腰を下ろした。

「おまえの在所の杉は良う手入れが行き届いて立派なもんじゃ」

「いやいや、おまえの在所の松も立派なもんじゃ」

二人はお互いに相手の在所の山林をほめ合った。松はハリに、杉は柱に使うことが多い。どちらがなくても良い家が建たなかった。だから、二つの在所は松と杉を仲良く分担し合ってきたのじゃった。

「赤松がはえておる所はわしらの山林じゃ。杉が生えておる所はおまえらの山林じゃ。よくわかるのう。お互いがしっかり守っていかにならん」

杉谷の若者はうなずいた。

「そうじゃとも。山の見まわり仕事はたくさん歩かにならんで、つかれるのう。急な斜面を上ったり下りたりじゃ。飯でも食うか」

二人の若者は背のうから、水筒と弁当を取り出した。福松の若者は杉谷の若者の弁当のおかずをのぞき込んで、ちよつと首をかしげた。

「おい、杉林でマツタケがとれるかや。もしかして、こつちの山から盗んでいったもんじゃなかるうな」

杉林の中に一本、何百年とも知れぬ大きな松の木がある。大人が二人でも抱きかかえられないほどの太さじゃった。杉谷の若者は顔色を変えて、その赤松を指さした。

「おい、なんてことを言う。あれを見る。俺たちの杉林の中にも赤松ぐらいあるぞ」

赤松の若者はにやつと笑った。

「あの赤松の場所だけはわしらの在所の飛び地じゃ。先ほど、赤松の木がはえておる所は福松の在、杉の生えておるところは杉谷の在と言うたばかりじゃないか」

杉谷の若者は食べておったご飯粒を口から飛ばして大きな声を出した。

「ばか言うな。あそこは杉谷の在所のものじゃ」

福松の若者は意地悪そうな顔つきになった。

「何じゃと、あの赤松が杉に見えるとしても言うのか。盗つ人めが」

杉谷の若者は食っていた弁当を放り出すと、福松の若者に飛びかかっていた。大きな



岩の上で上になり下になりもみ合っておったが、福松の若者の方が体格がちょっと良くて力もちよっと強かったから杉谷の若者は逆に組みしかれてぼかすかとなぐられてしまった。

口から血を流して帰って来た杉谷の若者はくやしゅうてたまらん。うつむきながら、とぼとぼと在所にもどってきたんじゃ。

途中で仲間の若者たちに出会った。

「よつ、九郎じゃねえか。山の見回り仕事、ご苦労さんじゃったのう。今日は一人じゃったのか」

「ああ、好高の奴、急に用事が出来たらしくて、来れなかったんでな」

「どうした。口から血が出ておる」

「ああ、何でもねえ」

「おまえ、着物もずたずたじゃねえか」

九郎は先ほどのくやしさが込み上げて来た。涙をこらえてくくつと声をもらした。

「何でもねえ」

九郎の目は真っ赤になっておった。

「おまえ、泣いてるんじゃねえか。言ってみろ。何があつか」

九郎はたえられなくなって、涙をぼろぼろとこぼした。

「福松の在所のマツにやられたんじゃ」

「ばか野郎、杉谷の恥じゃ。マツなんぞにやられて」

「俺もくやしい。奴は杉林の中のあの大きな赤松の生えている所は自分たちの飛び地じゃつて、言ったんじゃ」

「俺たちの杉林に生えている赤松のことか」

「そうじゃとも。それで俺が奴になぐりかかった」

今度は仲間の若者たちの方がいきり立った。

「よしつ、そんじゃ、こつちからやつてやろうじゃないか」

若者たちは福松の在所に行くと、小さな子を使ってマツを呼び出した。九郎は仲間がいるので心強い。

「やい、先ほどは俺のことをよくも盗つ人と言ってくれたな」

「おお、言ったがどうした」

「おまえの方が盗つ人じゃ。俺たちの山林まで取ろうとしておるじゃないか」

「ばか言うな。あそこは俺たちの領地じゃ」

九郎の後から仲間の声が飛んだ。

「何だと、マツ。つけあがるんじゃねえ」

九郎がマツの胸元をこづいた。マツは九郎に殴りかかった。同時に、福松の若者たちは一斉にマツに飛びかかってぼつかばかに殴ってしまったんじゃ。

今度はマツの方がくやしゅうてならん。マツは在所へもどると、仲間を集めた。仲間は

マツのはれ上がった顔を見て同情した。

「えらい目にあつたのう。そりや、いくらマツどんでも、大勢にやかなわん」

マツはどうしても、仕返しがしたくてならなんだ。

「杉谷の奴ら、俺たちの所から、マツタケをぬすんで行った。それを奴らに言ったら、このざまじゃ」

「本当に、盗んでいったんか」

「九郎の奴、どっさり、マツタケを持っておつた。

赤松が生えている方はわしらの在所のものじゃ。杉林にマツタケが生えるわけがねえ」

「そりや、そうじゃ」

「奴は杉林の中の赤松の下で取つたと言うが、そんな訳はねえ」

「そりや、そうじゃ」

「あの赤松が生えているところは俺らたちの飛び地じゃと言うてやった。そしたら、奴らに呼び出されてこのざまじゃ。俺らはくやしゅうてならん」

「マツどんがやり返すって言うなら、俺らたちも行こうじゃないか。俺らたちも杉谷の奴らは好かん」

福松の在所の若者たちはマツを先頭に杉谷に向かった。福松と杉谷の間の朝明川はかれて全部が砂の河原になっておつた。

杉谷の若者が河原に出て、ちようど道ぶしんに使う小石を大八車にひろい集めておつた。

その時、福松の若者たちが手に手にこん棒を持ってやって来た。杉谷の若者はすぐにマツが仲間を連れて仕返しに来たのだとわかつた。

杉谷の若者は大八車を捨てて、在所に逃げ帰つた。

「おおいっ、福松の奴らが仕返しに来たぞ」

杉谷の若者たちも手に手にこん棒を持って集まつた。

「よしっ、河原じゃ」

杉谷の若者たちは朝明川の河原に出た。

「誰もおらんじゃないか」

「俺らたちをおそれて逃げたんじゃ。俺らたちの方から出向いてやろうじゃないか」

杉谷の若者たちが河原を渡り終えようとしたとき、堤防のしげみから石つぶてが飛んできた。河原の中とて、かくれる場所がない。杉谷の若者たちの耳元をびいーん、びいーんと唸って飛んで行ったんじゃ。杉谷の若者たちの二、三人に石つぶてが当たつた。額が割れて血が飛び散つた若者もおつた。

「はかられた。もどれ、もどれ」

赤松の若者たちが立ち上がってはやす。

「赤松が生えているところは俺らたちの飛び地じゃ」

杉谷に逃げ帰つた若者たちが相談を始めた。

「杉林の中にあの赤松がある限り、奴らはいつまでも飛び地じゃというに違いない。あん

なものの、切りたおせ」

「しかし、天にもとどく赤松じや。誰が切り倒すんじや」

「九郎、最初にケンカを始めたのはおまえじや。おまえがやれ」

「俺ら、いやだ。だって、あの松の木にはテングさんが住んでおるって言うじやないか」

「テングなんぞ住んでいるはずがなからう。あれは福松の在の奴らが言うことじや」

「赤松の奴らは俺らがあの松の木を切っておると、きつとじゃましに来るぞ」

「俺らたちがガードしてやる」

結局、九郎が切りたおすことになった。

杉谷の若者たちは杉林の中の大きな赤松の根元に集まった。大きな赤松は風を受けてさわさわと鳴っておった。

九郎は赤松の根元で大ノコギリをかまえたが、なかなか切る気になれなかった。

「こんな大きな松を切るなんて、何だかかわいそうだな」

「こわくなったか。これを切らなけりや、ここは本当に奴らの飛び地になってしまいうぞ」

「じゃ、赤松の在所の奴らが来ないようによう見はつてくれ」

九郎は仕方なく大ノコギリの刃を赤松の幹に入れた。杉林の中の赤松は太さが大鋸の刃渡りの二倍もあったので木の周囲を廻りながら切った。風にゆれる幹の振動が大ノコギリの柄にひびいてきた。

「おおい、いよいよ、倒れるぞ」

大きな赤松はいつ動き出したかわからないほどゆったりと倒れ始めた。ぎぎつと声を出した。しかし、傾きかけると後は一気だった。

「九郎、離れる。危ないぞ」

赤松はどどーんと大きな音を立てて倒れた。その勢いで切った根元が跳ね上がった。九郎は逃げる間がなかった。はね飛ばされて天空に舞った。

「テングじや。赤松の上で昼寝していたテングが怒って九郎を飛ばしたんじや」

墜ちた場所が竹成と榊の間じゃった。そうそう、九郎と書かれた墓がぽつんと一つ建っておるじやろう。

## 十一

ある日のこと、山の畑で和吉夫婦は仲良う農作業をしておった。

「おら、のどがかわいたで水飲んでくる」

和吉が畑の側を流れる小川に入って水を飲んでいる間に和吉の女房のお房がいなくなっってしまった。

「お房、どこに行っちゃった」

和吉のこだまにまぎって、変な声が返ってきた。

「お房はあずかったぞっ」

和吉は声のする方に走った。

「お前は誰じゃ。お房を返せっ」

「おら、お房が好きじゃ。もらって行くぞっ」

「こーん、こーんとキツネの声がした。キツネのコン太の声にちがいがなかった。

「人間の女房を連れて行ってどうするつもりじゃ」

「おらのかみさんにする。お房はきれいで、気がやさしいで好きじゃ」

和吉は大事な女房を取られまいと、コン太を追いかける。コン太はお房を連れて逃げてゆく。

「お房、待ってくれ」

お房はすっかりコン太に化かされておるので、和吉の声が聞こえないらしい。コン太を和吉とかんちがいしておるのかもしれない。

「和吉、あきらめろ。お房はおらの女房にするんじゃ」

「コン太、お房を返せ。こらっ、どろぼうっ」

一面に真菰が生えている中に、お房を連れられたコン太と、それを追う和吉の姿があった。

「お房は俺らのもんじゃ。これ以上、追っかけてくれればお前を殺してやるぞ」

コン太の声が広い天からふるように聞こえる。和吉はコン太のおどしなどに屈するわけにはいかない。和吉もありつたけの声を出してさげふ。

「くっそ、今度こそおまえを捕まえて、毛皮にしてやるぞ」

大声に驚いているのは大空のトビや、地面の穴から飛び出して来た山モグラぐらいで、人は誰一人としておらなんだ。真菰の原を通り過ぎて、いくつもの山をこえ、いくつもの谷をわたり和吉は逃げるコン太を追う。コン太はお房をつれているのでさすがに疲れた。南向きの斜面に生えている大きな山梅の木の下に来た時だった。和吉がようやくコン太に追いついた。

「さあ、追いつめたぞ。コン太、俺らのお房を返せ」

「けっけっ、追いつかれたか」

山梅はトゲトゲの枝を四方八方に伸ばして真っ白い花を一面に咲かせておった。コン太は山梅の木の下にお房を連れ込んだ。見れば山梅の根元に大きな穴が二つ三ついている。

和吉はしゃがんで、山梅の木の下のをのぞき込んだ。コン太は自分だけ穴にもぐりこんだが、お房をうまく穴に引っ張り込めずもたもたしておった。和吉は腹ばいになり、腕を伸ばしてお房の足をつかむと、山梅の木の下からひっぱりだした。

「なんだ、キツネなんかに化かされて。しっかりしろや」

お房はうつろな目で和吉を見た。

「お前さんは誰じゃ」

和吉はかなしくなった。

「俺は和吉じゃ。しっかりしてくれ」

お房はなおもぼやっとしてつつ立っておった。和吉はお房を小川のそばまで連れて行く

と、その水をすくってお房の顔にかけた。

「あんた、何をしなさる。水などかけて」

「おお、正気にもどってくれたかや」

山の上からコン吉の声が聞こえた。

「お房はあきらめんぞ。お房、待っていてくれや」

「どうやら、コン吉はつづいておった別の穴から出て、どこかに逃げ出していつてしまったらしい。」

和吉はほっとしてお房といっしょに家にもどったが、このままにしておく訳にはいかんと思った。

「俺らは山に行つて来る」

「あんた、鉄砲なんぞ持って、どうなさる」

「コン太の奴を仕とめてやる」

「でも、そんな。かわいそうじゃ」

「ほおつておいたら、また、おまえをうばいに来るにちがいない」

和吉はさつそく、一人で山に出かけた。真菰の原を通り過ぎて、いくつもの山をこえ、いくつもの谷を渡り、コン吉の住む大きな山梅の前にやってきた。山梅はほろほろと白い花びらを散らし始めておった。

枯木や枯れ草を集めると、いくつもある出入り口の穴を探してはそれをつめていった。

最後に、一つだけつめない穴を残すと、つめた穴の入口に次々と火をつけていった。つめない穴からコン吉がいぶされて、飛び出して来るにちがいない。和吉はその穴に向かって腹ばいになって鉄砲をかまえた。

コン太はいつまでたつても出て来ない。山梅の木の真ん中にもほこらがあつて、コン太はそこから逃げ出して行ったのじゃが、和吉は腹ばいになって穴の中ばかり見つめておつたのでそれを知らなんだ。長い時間がたつて、大きなあくびを一つした。呑気なもんじゃ。和吉はそのまま眠り込んでしまった。どれぐらいたつただろう。和吉は寒くなつて、ぶるんと身ぶるいすると目をさました。何だかのどがいがらっぽい。大きなせき払いをした。

「えっへん」

空から大きなこだまが聞こえた。

「えっへん」

こだまではなくて、コン太の声じゃつた。

和吉は座りなおすと、

「えっへんが何じゃ」

と大きな声で空に向かって叫んだ。

「えっへん」

「えっへんが何じゃ」

同じことをくり返す。こうなつたら、もう意地だ。やめられない。和吉はこうして、夜

になつても家に戻らない。心配になつた女房のお房は村長の家へ相談に行つた。

「そりや、コン太の所じゃな」

数人の男衆がガン灯ともして、山梅の所に向かつて出かけて行つた。

暗い山梅の下で一人の男がひとりごとを言つておつた。

「えっへんが何じゃ。えっへんが何じゃ」

遠くから男衆が声をかけた。

「和吉どん。どこじゃ」

「えっへんが何じゃ」

「おう、こっちじゃ。こっちじゃ」

男衆はようやく座り込んでおつた和吉の側へ行つて、手を引っぱつて立たせた。

「和吉どん。しっかりなされ」

男衆が和吉を家につれもどすと、お房は和吉の着物に着いた枯れ草や木の葉をはたき落とすとした。

「まあ、あんた。よう帰つて下さつた」

和吉はうつろな目をしている。

「えっへんが何じゃ」

和吉はそれから同じことを繰り返すだけでご飯もろくに食べない。心配になつた女房のお房はまた村長の家へ相談に行つた。村長も困つた顔になつた。

「キツネツキじゃ。おはらいをせにやなるまい」

巫女さんのおはらいを受けると、和吉はすっかりもとにもどつた。しかし、自分を化かしたコン太の奴が憎うてならん。三、四ヶ月ほどすると、再び鉄砲を持って、山梅の下のコン太の穴に向かつた。

コン太の穴に着くと枯木や枯れ草を集め、いくつもある出入り口の穴を探しては、それをつめていった。勿論、今度は山梅の真ん中にあるほこらにも大きな石をつめた。最後に一つだけ穴を残すと、他の穴の入口に火をつけていった。

いぶされて中から小さなキツネの子供たちが出て来た。後からコン太と雌のキツネがこんこんとせきながら出て来た。

それを見た和吉は鉄砲をお房も初めてのやや児を産むうたずそのままそつと自分の家に帰つていった。お房がやや児を産んだころにはキツネの穴の山梅は青い実をたわわにならせておつた。

## 十二

お寺の暮れ六つの鐘がぐうおんー、ぐうおんーと鳴るころ、庄屋は領主の住む千草城からもどつて来たのじゃつた。初夏のこととて、空には未だ、お日様が残つてござつた。

「奥ざしきにツルを呼んでくじやれ。とくべつの用事じゃと申してな」

とくべつの用事とは何か、庄屋の娘はおおよその見当がついておった。庄屋の妻はいやがる娘を座敷につれてきた。

「おまえも年頃じゃ。お婿さんをむかえねばならん」

娘はだまってうつむいている。大方こんな話じゃろうと思っていたのだ。庄屋はできるだけおだやかな笑顔をつくった。

「ご領主さまの三男で、三於さまはどうじゃ。三於さまなら、おまえも知っていよう。むかしお城に上がったとき、いっしょに遊んだではないか。おまえのことは内々、ご領主さまにもお話がしてあったんじゃ」

ツルは少し、顔を上げた。細面の美しい顔立ちじゃった。

「三於さまは乱暴なお方ゆえ、きらいじゃ。婿をとるなら太助がいい」

庄屋は顔を曇らせた。

太助は貧しい水呑み百姓の小せがれじゃったが、氣立ての良いやさ男じゃった。村の娘たちは太助に恋いこがれてしもうた。庄屋の一人娘のツルも太助が大好きじゃった。

「おまえと太助では身分がちがうじゃろう。三於さまは勇かんなお方じゃ。戦で手がらを立てられて、やがては大きな国の大名になれるじゃろう。さすれば、ゆくゆくはおまえも大名の奥方と言うもんじゃ」

ツルのにぎりしめている小さなこぶしがかすかにふるえた。

「いやなものは、いやじゃ」

娘はがんとして首をたてにふらない。庄屋は仕方なく、妻にあたる。

「だいたい、おまえが甘やかして育てるからいかんのじゃ。せつかく、三於さまが養子にきて下さると言うのに」

庄屋の口の両わきにはツバが白い泡になってたまっておった。残念でならないのじゃった。

「あんたこそ、甘やかしているくせに。ツルがいやならしかたがないでしょう」

村人に恐れられている庄屋も妻と娘にはかなわん。

カワウソのウツソーは庄屋の屋敷の池に忍び込んで、それらの会話を聞いてしまった。ツルはきれいで心もやさしかったから、ウツソーもツルが大好きじゃったが、何せ、ツルは太助に夢中じゃったから、太助がけなりいてならなんだ。太助をおとしいれる何かよい勘考はないものかと思あんしたもんじゃ。

「そうじゃ。大川からご禁制のマスをとって、太助のしわざに見せかけよう」

ウツソーはひとりごとを言うと、さっそく、太助に化けて大川にでかけた。お日様は沈んだばかりじゃった。

庄屋は朝と夕べ、決まって大川を見回ることにしておった。太助に化けたウツソーはその頃を見はからって、大川の中に入った。

庄屋がしぶい顔をして通りかかった。ウツソーが大きなマスを捕まえてかかえ上げようとすると、マスは水面ではねた。庄屋は物音に気づいた。

「太助、ご禁制のマスを捕っておるな。ご領主さまにつきだしてやる」

太助を罪人としてお城に送れば娘のツルも太助のことはあきらめ、三於さまを婿に迎えるじやろうと思うた。

ところが、カワウソのウツソーはうまくやったと思ったしゅん間、いつものくせで尻尾を出して水面をばしゃばしゃとやってしもうた。

庄屋は思わず大きな声を出した。

「何じゃ、カワウソが太助に化けておったのか」

声を聞きつけた庄屋の若い衆が大きな網を持って川に入り、ウツソーを取り巻いた。さすがにウツソーも逃げられなんだ。捕まって川つぶちのオリに入れられてしもうた。

庄屋は捕まえたウツソーを見て、にが笑いをしたもんじゃ。

「太助だったら良かったものを。こいつは毛皮にしてご領主さまにさし上げるしか仕方がなかるう」

太助は川つぶちの小道を通りかかって捕まっているカワウソを見つけると、そつと夜中にやって来て、オリのかんぬきをはずした。

「さあつ、逃げるんじゃ。ぼやぼやしていると、毛皮にされるぞ」

ウツソーはオリを出て逃げた。

「太助、借りが出来てしまったな」

借りは早く返しておきたかった。翌日の朝早く、ウツソーはお礼にマスでも捕まえて来

てやろうと思うて、また、大川に出かけた。太助の母親が病気でマスを食べたがっておるのを知っておったのじやった。

今度はご領主様の三男の三於に化けた。ツルを三於にとられるのもいやじやった。三於をおとしいれてやろうと考えたのじや。

又もや庄屋が通りかかった。

「ご禁制のマスをとっておるのは誰じゃ」

庄屋がよく見ると、今度は三於である。

「こりや、三於さまでござりましたか。三於さまでは仕方がない」

庄屋は意外にも頭をかいて、おじぎをした。

ウツソーは庄屋に頭を下げられて、つい、ほんわかと良い気分になった。そのとたん、いつものくせで尻尾を出すと、ばしゃばしゃとやってしまった。

「何じゃ、こりや。また、カワウソじゃないか」

またもや、大きな網を持った庄屋の若い衆に捕まって、川つぶちのオリに入れられてしまった。今度はオリに錠がおろしてある。さすがに、太助も助け出すことが出来ない。

太助は庄屋の家の門口の木のかげで、ツルが出て来るのを待った。

「おツルさま、庄屋さまの腰にあるカギを取って来てくれませぬか。カワウソを逃がしてやりたいのです」

ツルは太助の頼みなら、何でも聞こうと思うておった。夜中にそつと庄屋の枕元からカ



ギたばを持ち出すと、月明かりの中を太助の所に出かけた。

「もうし、太助さん。カギを持って来ましたぞえ」

こうして、二人でウツソーを逃がしてやった。

翌朝、庄屋が起きると、オリの錠はおろしてあるが、中のカワウソは逃げた後じゃった。「カギはちゃんと枕元にある。どうして逃げたのか不思議じゃのう。カワウソは化けてけむりにでもなったのじゃろうか」

ツルはすまして、知らん顔をしておった。

美しい夕日が西の山に沈むころじゃった。その日、太助の家のうらを流れる小川から、ぱしゃぱしゃという音が聞こえるので、出てみるとウツソーが長い尻尾でおいで、おいでをしておった。

太助がついて行くと、ウツソーは古屋敷やしきの中に入って行った。化け物屋敷として、皆が恐れて近づかないところじゃった。真つ赤な夕日が西の山に沈むころには屋敷の床下から金色や銀色に光る煙が出るのが見えるということじゃった。人々はそれを妖怪の仕業じやと言い合っておそれておった。

ウツソーはその光る煙が出るところへ太助を連れていった。よく見ると、さし込んだ夕日にてらされて、こぼれている砂金が光っておるのじゃった。ウツソーはそこを前足でかりかりとかいて見せた。

太助がそこをほると、うめられていた宝物がどつきりと出てきた。

「こりや、庄屋さまに知らさねば」

正直者の太助がウツソーを見ると、

「おまえはばか正直じゃ」

と言わんばかりに、首を左右にふった。

「そうか。俺にだけ教えてくれたんか。そんじゃ、他人に知らせるわけにやいかんのう」  
ウツソーは満足そうにうなずいた。うまくゆくときは何をやっても、こんなもんじゃ。

ご領主さまの三男じゃった三於さまは間もなく戦で亡くなられ、大金持ちになった太助はツルを女房にして庄屋の跡をついだということじゃった。

### 十三

唐丸カゴは浪速から江戸へ走った。着いた先は世にも恐ろしい拷問部屋じゃった。

「なぜに私がこのようなところに送られたのでござりまするか」

男は壁にかかっている数々の拷問道具を見てふるえあがった。

「貴殿は初太郎殿の腹心のご家来じゃった。佐渡の金山から掘り出した金をどこにかくしたか。それを申さばすぐにも自由の身になれる」

男は頭をふった。

「わが主人の初太郎は清廉潔白人柄でござりました故、そのようなかくし金などござり

ませぬ」

役人は壁に立て掛けられておった青竹を取った。青竹は手元まで四つにさいて、握るところだけあら縄が巻いてあった。

「初太郎殿は岡崎の頃より家康公のご家来でござったが、突然、秀吉公の家来にくら替えをされた。恩を忘れて敵方に走るような者を清廉潔白人柄とは言えまい」

男は役人が青竹を持ったのを見て肩をすぼめてふるえた。役人は笑いながら青竹を素振りした。空気を切りさくひゅーつという音が聞こえた。

「我が主人の初太郎は事情があつて秀吉公の家来になつたのでござる。家康公のご恩も決して忘れてはおりませなんだ。かくし財宝などをつくるような人柄ではござりませぬ」

男はエビのようになかつこうになつて役人に頭を下げた。

「そなたは聞きしに勝る話し上手じゃ。じゃが、わしも江戸の与力じゃ。そうは簡単にだまされぬ」

「とんでもござりませぬ。真実を言っておるのでござりまする。どうぞ、私めの申すこと、お聞き入れ下され」

男はさらにひれ伏して額を土間にくっつけ、おろおろした。

「武士たるもの良くもまあ、それほどまで卑くつになれるもんじゃ。それも芝居のうちか」

「とんでもござりませぬ。私は初太郎様にひろつていただく前は北伊勢の千種の在に住ま

いなす刀鍛冶でおじやつた」

「初太郎殿は秀吉殿の下で佐渡金山の奉行になつたではござらぬか。そして、そなたは金山の鍛冶師の頭領となつた」

「それは間違いござりませぬ。鍛冶の腕を見こんで下さつた。初太郎さまは私を侍に取り立てて下さつた」

「そなたは初太郎どのが亡き後、そのぼく大な金をどこかにかくした。これは上様が申されたこと故、間違いない」

男ははげしく頭をふつた。

「与力殿、主人の初太郎は佐渡で取れる金はすべて大阪城に運びましてござりまする。太閤秀吉殿がその金を朝鮮出兵の軍用資金にされたことは家康殿もも良久知つていることとござりまする」

与力は男の首ののど仏の辺りを青竹で押し上げた。

「問題は関ヶ原の戦いの後から、大坂城のかん落までの間じゃ。佐渡で取れた金の流れがつかめぬ」

男は苦しそうな顔をして、目を白黒させた。

「それも京都の織部殿が良くご承知だつた筈ではござりませぬか」

「織部も恩ある家康殿を裏切つて、大阪夏の陣の直後に切腹させられたではないか。今は亡き織部が知っていたかどうかは知るよしもない」

「関ヶ原の戦いの後から大坂城の陥落までの間は金を掘るところではなかったのです。ござります」

「まだ、ごまかそうとするか」

与力は立ち上がって男の上着を刀でさいてはぐと、裸になった背中を青竹で何度も叩いた。男は青竹がひゅーばちばちつと言う度に、うっ、うつと悲鳴を上げてもだえた。男は頭からぐつと前にたおれこむと、唇から血を流した。

「申し上げます。そのような乱暴なことは止めて下され」

与力は男を引き起こした。男は血と砂をぺっぺっとはいた。

「申し上げます。仕方がござりませぬ」

与力は男のマゲをつかんでゆすった。

「もし、でたらめだったら、耳と鼻をそぎ、目玉をくりぬいてやるぞ」

男の目から涙が流れ落ちた。

「知らぬものは知らぬ、否、そんな事実はないのでござる。なのに、ご無理なことを」

与力は再び青竹を持って、男の背中をめった打ちにした。男は打たれる度にひいひいとあわれな声を出した。

「申し上げます。申し上げます」

男の背中が割れて、真っ赤な血が流れ出している。

与力は粗塩と赤い唐辛子の粉を持ち出した。

「傷口がうむと気の毒じゃ。これを傷口にぬってさし上げよう」

男はみぶるいした。

「申し上げますによって、お許しを」

「けっ、口ほどにもない奴よ。目玉をくりぬかれる時はこんなもんじゃないぞ。

まさか、嘘じゃないだろうな」

男の口には涙と鼻水が混ざって流れ込んでおる。その為に言葉が聞き取りにくい。

「能登半島でござる。その先端にノロシと言うところがござる。岩が突き出て、大潮の干潮には洞窟が現れます。その中に」

「なに、大潮の干潮とな。もつと、はつきりと申せ」

与力は良く聞き取れない所を聞き返した。

男は口の中にたまった液体をぐくりと飲み込んで、今度ははつきりと言いそえた。

「半月先の新月のころが大潮でござる」

「早速、殿に許しを得て、そこへ行って見よう」

男はにっこりと笑った。

「ああ、それでは、これで私めはお許しただけなのでござりまするな。痛かった、痛かった。もつと早く言えば良かった」

「ああ、いやいや、それは財宝を見つけてからじゃ」

「与力様、お行きになられますならば半島の東側をお通りなされよ。」

なかなか、よい温泉がござる。きれいな湯女もおりまするぞ」  
与力はまゆをでれつと下げた。

「馬鹿を申すな。わしが帰るまで、そなたは牢屋じゃ」

半月が過ぎて、与力は四人の同心を連れて能登に向かった。一、二週間ほどすると、恐ろしい形相をしてもどつてきた。

「貴様、ぬけぬけとだましおつて。やい、どうしてくれるかわかっていような」

男は背中傷もちょうどいえたばかりじゃつた。

「温泉はいかがでござりました。良きお湯と良き女子でござりましたでしょう」

与力は男にばかにされていると思つて、ゆでたこのように真つ赤になつておこつた。

「よつし、思い知らせてやるぞ。逆さ吊りの釜ゆでがよいか、青竹の上に座つて石うすを抱くが良いか」

「それでは不首尾でござりましたか。わたしは確か、黄金は狼煙の先の洞窟と聞いたように思いましたが」

「黙れ、黙れ。苦勞に苦勞を重ねしよう細に調べたが黄金など一かけらもなかつたわい。この食わせ者めが」

「だから、初手から黄金の財宝などかくされてはおらぬと申しているではござりませぬか。嘘など申しているのではござりませぬ」

与力は隣の間ひかえる同心を呼んだ。

「こ奴のヒザをくだいてやる。青竹を並べて、その上に座らせよ」

男は青竹の上に座るのをこぼんだ。

「それだけはんべんして下され。親からいただいたヒザがつぶれては歩けなくなりまする」

与力は持っていた扇子で男の頬をぱしつとたたいた。

「焼き鏝、釜ゆで、何でもあるぞ。もつとつらい方が良いか」

男は並べられた青竹の上に正座させられて、おえつしながらふるえておつた。

「わたしが悪うござりました。今度こそ、本当のことを言います。許して下さい」

石うすを男のそばまで運んで来た男が笑つた。

「この男は本当に侍でござりまするか。女、子供のようにたわいない」

男は同心にも頭を下げた。

「もう、侍は捨てております。町人でござる。」

石は二つまでにしてくだされ。がまん出来ませぬ。二つでも関節はつぶれてしまいます」  
同心は面白うなつて、六つも石うすを運んだ。人は時としてぎんこくになれるものじゃ。

男のごつちや混ぜになつた鼻汁と涙が青竹の上に流れ落ちた。

「主人の初太郎もこのわたしも正直一辺倒の人間、何でこのような目にあわねばならんものじゃ」

同心は男の膝に一つ石うすを乗せた。男は齒を食いしばつた。二つ目を乗せた。くつと

言って腹に力を入れた。そのとたん、男がへをひった。与力と同心が笑った。

「二つぐらいは何でもない。これからじゃ」

男は大きな口を開けて叫んだ。

「申し上げます。本当のことを。今度は間違いござりませぬ。

関ヶ原でござります」

同心は三つ目の石を乗せた。みしみしと青竹の割れる音がした。

男がうめいた。

「戦場になった関ヶ原の周辺は荒れ果て、人々は土地を捨てました。そこに目をつけて、土中深くうめたのでござる。

上には十人かかっても動かぬ程の石灰岩が乗せてあります」

四つ目の石を乗せた。太ももとふくらすねがのしモチのようになり血がふきだした。

「本当か。もし、これが嘘なら、今度は目玉をくりぬいてやるぞ」

与力は楽しんで男を痛めつけているように見えた。五つ目の石を乗せた。太ももが破れて鮮血と共に筋肉がはみ出した。

男は苦痛のために何も考えることができぬように頭をふった。

「嘘ではありません。誰が嘘など言うものか」

六つ目の石が乗せられた。すねと太ももの骨が折れるみしみし云う音がした。

「間違いないか」

与力が念を押したが、男はもう何も耳に入らないらしくただ泣くのみじゃった。

与力は十人の若い同心を連れて関ヶ原に向かった。江戸から関ヶ原までの往復なら一週間もかからんじやろう。男はもつと時間がかかる場所を言えば良かったと後悔しておった。

果たして、一週間後、与力はさらにすざましい形相をしてもどつてきた。

「目玉をくりぬいてやる」

男のつぶされた両足はまだ、少し動かすだけでも皮膚から黒い血が流れ出た。

「このようにされてしまつては生きて居つても詮なきことじゃ。殺して下され」

与力は小刀をぬいた。

「しぶとい奴め。金塊が見つかるまで、殺しはせぬ」

男は目を閉じた。

「わたしは何も嘘を申しておりませぬ。主人の初太郎もわたしも正直者でござります。天下の黄金をかくして猫ばばしようなどという料簡は決して持ちませぬ」

与力はひかえの間にいる同心を呼んだ。

「くりぬいた目玉を入れる手おけを持ってまいれ。手ぬぐいもな」

男は目を開くとすさまじい表情をして同心をにらみつけた。

「これ程申しあげても、この真実が信じられぬと申されるか。ならば、嘘をつくより仕方がござるまい。

わたしは侍を捨て、浪速で妻子と商いをして、その日の糊口をしのぐ身でござる。

金塊の有りかなど知っておればこんな暮らしをしておらぬ」

与力は思わずあいづちを打った。

「じゃが、目玉はくりぬいてやる。そなたが嘘をついたバツじゃ」

「無理に嘘をつかせたのはそちらの責任じゃ。何もわたしにとがはない」

与力は男の左目をくり抜いた。

男は顔を朱色に染めながら、残ったもう一方の目で与力をにらんだ。

奉行は老中のもとに参上した。

「与力にきつく取り調べをさせましたが、やはり、奴めは白におじゃざりました」

老中は口をへの字に曲げて宙をにらんだ。

「あの膨大な金塊はどこかにある筈じゃが、そうまでしても云わぬなら奴めは本当に知らぬのであろう」

「奴めを今後、いかがいたしましたしょう」

「仕方がない、逃がしてやれ。上様には残念ながら奴めは何も知らなんだと申し上げよう」

男は箆に乗せられて、再び、浪速の妻子のもとへ送られることになった。

大井川を渡った時じやった。男はこらえていたかのように笑い出した。

「ふふつ、俺もタヌキおやじを相手に、ここまで芝居がうてるとは思わなんだ。な。ふふつふ、今に見ろ、あの金塊はきつと役に立つ。ははあはあ、はっはっはっ・・」

それを聞いていた箆かきは男が奉行所でせつかんを受けて気が狂ってしもうたのじやろ

うと思った。

それでも箆はえいほつ、えいほつと浪速に向かったそうじゃ。

慶長六年から江戸幕府は貨幣を鑄造し始めた。即ち、慶長大判、慶長小判じゃ。江戸幕府はおびただしい金塊を必要としておった。

男は浪速で豪商となり膨大な金塊を使ったので、浪速は江戸よりも富める都市となった。

#### 十四

昔、竹成村と云う所は武成村と書いた。千種から竹成に入ると大字首塚、大字上追上、大字下追上へと続く。これから話すように竹成はいかにも武成と云うにふさわしい所じゃった。

織田方の軍勢に攻められた千種城の城兵は早々と城を捨てて竹成の方へ逃げた。千種城側は敵がうんかのごとき大軍と知って、籠城してはとてもささえきれぬと初手から思うたのじゃ。

すでに昼は過ぎておった。空には暗雲がたれ込め、時折南から北へと春のつむじ風がかけ抜けていった。千種城の兵は一団となって首塚にさしかかった。首塚には背丈をこえるササや雑草が生い茂っておったので、いったんここに身をひそめることにしたのじゃ。

「織田の兵共に気づかれぬように草原の中で身をかがめよ。もしも敵が草原の中にひそむ

われらに気づいて分け入って来たなったらばかねてのように太鼓で合図する。  
どんだん、どんだん、どんだんと二つ続けて打てば攻撃の合図じゃったな。

どんだん、どんだん、どんだんと続けて打てば再び北に向かって逃げる合図と云うてあったがおぼえていやるか」

織田方の軍兵は千種城がも抜けのからと知るや、これを追って首塚にやって来た。先頭の兵団が草原のほぼ真ん中に来た時じゃった。

どんだん、どんだん、どんだんと太鼓が鳴った。

織田方の軍兵に向かって草むらの中からびゅんびゅんと矢が飛んだ。千種方はいわゆるゲリラ戦に持ち込んだのじゃった。

「伏兵じゃ。油断するな」

織田方の軍兵はばらばらとたおれたが、何せやって来たのは大軍じゃったからたおされてもたおされても次々と押し寄せて来た。やがて首塚のササや雑草は双方の血で赤く染まった。

どんだん、どんだん、どんだんと続けて太鼓が鳴った。

千種方の兵は勝手知ったる地元の地理じゃったが、かなわぬとみて再び北に向かって逃げ始めた。

ちようど下追上まで来た時じゃった。

「待て、向こうからも兵が来る」

千種方の兵が立ち止まった。相手方は声高に名乗った。

「わしらは員弁の者じゃ。そなたたちは千種城の兵か」

「いかにも、織田の兵に追われておる。員弁城の方々、われらにお味方いただけるのか」

「負けの側に味方して何の得があるうぞ。そなたたちを捕らえれば織田方からほうびがもらえらる」

「千種と員弁は古来より親交を厚くしてきたではないか。われらは員弁城に助けを求めて逃げて来たのじゃ」

「わしらとて織田の大軍は食い止められぬ。そなたたちを助ければわしらも滅ぶ」

員弁城の兵たちは千種方の兵に刃を向けた。今度は織田の兵に加えて、員弁の兵たちも敵となったのじゃ。千種方は前後を敵にはさまれて、もはや逃げるすべを失った。ならば武士らしく敵を斬って斬って斬りまくって斬死するより仕方がない。

「武士は戦で死ぬるが本望じゃ」

千種方の太鼓がどんだん、どんだん、どんだんと鳴った。

下追上から野中にいたるまでのあちこちで小競り合いがあり千種方の兵は次第に減って、ついに城主とそれを囲む数人の家臣だけとなった。

「このままではかえって標的にされる。ばらばらになって逃れるのじゃ。予のことは心配要らぬ」

千種城の城主は一人田んぼの中にある石灰小屋にかくれた。石灰小屋は石灰をしまうた

めの高さ六尺（一・八メートル）ほどの三角形の屋根だけからなる小さなわら小屋じゃった。

織田方の兵は千種方の残党がかくれていないか、一帯の農家や物置小屋をくまなく調べてまわった。いわゆる落ち武者狩りじゃ。

「もう調べてないのはこの石灰小屋だけじゃ」

「こんな小さな所ではかくれられんぞ」

「試しにちよつとのぞいていたらどうじゃ」

「敵は捨て身で向かってくる。のぞいたとたんに中からぐさつとやられるかも知れん」

「まさかじゃが、小屋の外から槍で突いてみたらどうじゃ」

「なるほど」

石灰小屋にかくれておった城主は気が気ではなかった。

やつというかけ声とともに槍の穂先がつっこまれた。身動きも出来ぬほどのせまい小屋の中じゃった。穂先が太股を貫通した時、城主はくつという小さな悲鳴を上げた。

「何か中から声が聞こえなかったか」

「いや、何も」

城主は槍の柄の部分握ると、自分の太股を穂先から抜いた。そして素早く穂先に着いた血をふいた。

「何か手応えがあつたぞ」

「引き抜いてみよ。血がついているかどうかじゃ」

城主は槍の柄から手をはなした。槍は引き抜かれていった。

「血など付いておらん」

「念のためじゃ、もう一度突いてみよ」

今度は穂先が左腕をつらぬいた。城主は歯を食いしばって柄の部分握り、そつと穂先を抜いた。そして再び素早く穂先に着いた血をふいた。

「やつぱり、こんな所じゃ誰もおらん」

織田方の兵はもどつて行つたが、城主は槍で太股と左腕をつきぬかれ動くこともできないだ。

夕方になり、やがて一晩が過ぎた。翌朝、一人の農夫が石灰小屋にやつて来た。

「あつれ、お侍様。どうなされたじゃ」

「昨日の戦を知っておるであろう。われらが千種城は他国の兵にうばわれた」

「敵は尾張の織田様でござりましたな」

「予は千種城の城主じゃ。予を助けてくれたならばそちに千種の姓を与え、士分に取立ててやろう」

「もつたいねえことござります。汚い所でござりますがどうぞわが家におこし下され」

千種城は陥落しておつたから城主は何の権能も無うなつて、単なる一人の落ち武者にすぎなんだ。苗字を貰い、士分に取り立てやると云われても何ら実効の無いことじゃつた。



否、落ち武者をかくまうと云うことはむしろ危険なことじゃった。

その後、千種城の家臣じゃったものはこぞって千種の姓を捨て、身元をかくした。千種に千種の姓が無く、竹成にあるのはそれがためじゃという。

十五

「春先から雨が多て田植えの水には事欠かなんだが、田植えを終わるとどうじゃ。一滴の水も降らん。片照りとはこのことじゃのう」

「俺らの田んぼは砂地じゃでの。もう、稲草はしおつとなつて枯れそうじゃ」

「どこも同じことよ。何んぞ、お天道さまの気に入らんことでもあつたんじゃろうか」

二人の男は溜田子の年番で溜の周囲を歩いておつた。一人は胡麻塩頭じゃつたから四五、六じゃろうか。もう一人は二十過ぎのニキビ面じゃつた。周囲の小高い堤は草がちりぢりによれて枯れたようになり、いつもより一層高こうなつたようで溜の中まで良う見えた。水はすり鉢形をした溜の真ん中に少し残つておるだけじゃつた。その水たまりの中でフナやドジョウが泥んこになつてぐじゃぐじゃ動いておつた。水たまりの周囲には野鳥の足跡が無数に付いておつた。

「このままでは飢饉になるかも知れん」

「苦勞して植えて、田の草まで取つたのに切ないことじゃ」

地面は真つ白に乾いて二人が歩く度に足元から砂ぼこりがたつた。

どこから来たのかわからなんだがはげた頭の長い白ひげを生やした翁が堤の中程に立つておつた。

「これこれ、お若いの、そうもゾウリを引きずらんで歩きなされ。砂ぼこりがたつてはなにか」

「爺さんがおまえに何か云うとるぞ」

ニキビ面の男が翁の言葉にくつてかかった。

「何じゃ、爺。勝手に俺らたちの溜に来やがつて。つべこべごとくを並べるんじゃねえ」  
数日前から一人の翁が堤に小屋掛けしておるとは聞いておつたが、二人がこの翁に出会ったのは初めてじゃつた。

「数日前に、この溜に龍神様のごぎつてのう。わしはその時にお供をしてきたのじゃ。今は休んでおられるが、もし目を覚まされた時、龍神様のお目玉に砂ぼこりでも入つたらどうする。さぞかしお怒りになるじゃろう」

「もつたいぶつて云うな。この溜には龍神様が住んでござるじゃと。それじゃ、雨でも降らせてもらおうじゃないか」

「これこれ、物には道理と云うものがある。龍神様に降雨をお願い申すのならお供えをしてご祈とうするのじゃ」

ニキビ面は尚もあくたいをついた。

「爺、おまえはそのお供えを盗んで食おうと思っておるのじゃろう」

さすがに胡麻塩頭は聞くにたえられなんだのか、ニキビ面の男の着物を後ろから引っ張った。

「何じゃい、この爺さんの肩を持つ気か」

「まあまあ、そうもかんかんするな。ところで爺さん、龍神様に雨乞いをするると本当に雨がふるのじゃろうか」

「さよう、まずは祭祀を調えられよ。わしが舞を舞って進ぜよう」

ニキビ面の男が胡麻塩頭を押し退けて、また前へ出た。

「よぼよぼ爺が舞を舞うじゃと。ろくに腰も立たん老いぼれが」

「若造、言葉はつつしみて使うものじゃぞ」

翁はすつと小屋にかくれた。二人は翁の云うことなど気にせずになおも堤を歩いた。

「おい、何だか俺らたちのおる堤が動いたような気がした」

胡麻塩頭がそう言った時、激しい揺れがおそった。

「これは地震じゃ。雨は降らんし、天変地異の前触れかも知れん」

あまりの揺れに二人はあわてて溜の堤からかけおりた。二人は堤の下の道で近所の農婦に出会った。

「えらい地震じゃったのう」

「何を言わしやる。ちつとも地震など無かったのに」

自分たち二人はあんなに怖ろしい地震にあつたのに誰も知らぬとは思議なことがあるもんじやと思つた。地震があつたと云うてくれたのは巫女さんだけじゃつた。

「あの地震はナマズが動いたのでは無うて、へびが動いたのじゃ。」

昔はどここの地方にも巫女さんと呼ばれて占いや口寄せなどをする女が住んでおつたものじゃ。巫女さんは靈力を持つ者として畏怖されておつた。

「へびじやと」

ニキビ面の男は何かと他人にくつてかかるたちじゃつた。

「龍神と云うた方がええかも知れん。蛇がさとで千年、山で千年、海で千年過すと天にのぼつて龍になると云う。龍潜と云うのは龍がまだ天に昇らないで水中に蛇の姿で居るところを云うのじゃ」

「では、その龍潜が俺らたちの溜におるとでも云うのか」

ニキビ面の男は突っかかるような口調になった。一緒におる胡麻塩頭はとりなしをせねばならなんだ。

「巫女さんの云われることじゃ。間違いは無からう」

巫女はもうニキビ面など相手にせず、胡麻塩頭の方にのみ話しかけた。

「この日照りを収めるには溜の龍神をまつらつしやるが良からう。龍になる前の蛇は往々にして翁の形で現れるそうじゃでのう」

「ではあの爺さまが蛇の精じゃと云われるか」

「おそらくはそうじゃろう」

溜田子の年番じやった二人は早速、田子の衆を集めて寄り合いを開いた。

先ず、胡麻塩頭が口を開いた。

「ずっと溜をまわったが、もう溜に水はない。水源も見に行つたがかれてしもうて水がわかん、これ以上みぞ掘りをしても何の効き目もなからう」

胡麻塩頭が言い終わる前にニキビ面の男が口出しをした。

「雨乞いの祈とうじゃ」

とつぴようしもないニキビ面の男の言葉じやったが、田子の衆とて他に思いつくようなことはなかった。

そこで巫女さんに細かい手はずを教えてもらい祭祀を執り行うことになったのじゃ。

朝早くから田子の衆は溜の堤に集まった。そして、酒やら塩やらマンジュウやら色んなお供えをしたもんじゃ。

神主さんたちのかなでるシヨウやヒチリキ、太鼓の音が溜の堤から流れ始めた。数日前から堤に小屋掛けしておった翁が現れた。

「天上の大神様に舞を奉納申します。何とぞ雨をお恵み下され」

いつの間にか白い装束に着替えた翁は舞い始めたのじやった。

するとどうじゃ。東の空から天空に向かつて糸を引くような竜巻が現れたのじやった。

ぽつりぽつりと雨粒が落ち始めた。そして、激しく降り始めたのじやった。田子の衆が家に帰り着く頃には土砂降りでも道も田んぼもわからん程になった。

溜池の堤が崩れ始め、中から黒龍が姿を現すのを見たと言う者もおった。舞っておった翁は龍にまたがると、そのまま天空に上っていったそうじゃ。その後、この溜池をだれ云うと無く翁溜とよんだ。

ニキビ面の男は雨乞いの祈とうは自分が云いだした事じやと、そりゃあ自慢したもんじやった。

その後、昭和の終わりに翁溜は耕地整理でつぶされ田子も解散した。

## 十六

あれほど日照りが続いたというのに、今度は一度降り始めると止むことを知らなんだ。古来、雨乞いという祈とうはあるが、晴れ乞いと云う祈とうは聞いたことがない。まあ、てるてる坊主をつくって窓辺につるすぐらいじやった。

かんかんかーん、かんかんかーんと半鐘を叩く早鐘の音が聞こえた。蓑笠着けた若い衆が大声をだして走った。

「おーい、砂ごしの堤防が切れたぞ」

川は上流から土砂を運んでくるので長年月の間に川底が高くなる。その度に堤防の石組

みを高くする。やがて川底の方が周囲の平地より高くなる。いわゆる天井川になるのじゃ。天井川は一度堤防が切れると、濁流が一気に平地を目指して押し寄せる。濁流は田畑も家も呑み込んで行くんじや。

「カマスや俵に土砂を詰めて砂ごしの堤防に運んでくれ」

どこでも一家に一台は大八車があった時代じゃった。土砂を詰めたカマスや俵を運ぶ大八車の長い列が土砂降りの中で墨絵のように見えた。

砂ごしの堤防では村長が差配して若い衆たちに運び込まれた土砂入りの吠や俵を投げ入れさせておった。

ところが決壊したところを堰き止めるのは容易なことではない。吠や俵は勿論のこと、丸太や大きな石もどンドン投げ入れたが投げ入れても投げ入れても流されるだけじゃった。

村長は投げ入れるのを止めさせた。

「このままではいくら投げ入れても無駄じゃ。誰か良い智慧はないか」

例のニキビ面の男が進み出た。

「村長さんよ。これは龍神さんの垂多んじや。折角、俺らが言い出して雨を降らせて貰うたのに何のお礼もしておらんじやろう」

男は先の干魃に雨乞いを提案して雨を降らせたのは自分の手柄じゃと思うておった。じやが、誰もがこの手柄をちゃんと認めておらぬとも思っておったのじゃった。

「おお、龍神さんに雨乞いをするように言い出したのはおまえじゃった。今度 はまた何ぞ良い勘考でもあるか」

「今度は雨がおさまるように龍神さんへ生贄を捧げてはどうじゃ」

「何を生贄にするんじや」

「昔から堤防工事には人柱としたもんじや」

「何じゃと、今の世に人柱などと」

「このままでは田畑も家も全部流される」

男は今度こそ、村長が自分の提案を手柄として認めるじゃろうと思った。

「では誰を人柱にするんじや」

村長は困った顔をして皆の衆をみまわした。皆の衆は自分が目立たぬようにと急に静かになった。人柱に選ばれるということは生きてまま水底に沈められるということじゃった。

「誰ぞ、村のために命をささげてくれる者はおらんか」

例の男は得意げに大きな声を出した。

「クジじや。クジに当たった者が人柱になる」

皆の衆はしいーんとなつてしもうた。クジ引きで自分があつてしもうたらどうしようかと思うたのじや。

「クジか、誰に当たるかわからん。皆の衆、それでも良かな」

激しい雨がスゲ笠をつらぬいて霧のように顔にかかり、蓑の中までしみ通っておったが

誰も彼も石像のようになっておった。じゃが、後ろの方におった年輩の男がおもむろにしゃべり出した。

「此間、龍神さんをお願いしたときは巫女さんに占のうてもろた。やっぱ、どうすれば良か巫女さんに占のうて貰ろうたらどうや。人柱っちゅうのはちよっと置いといて」

例の男はその年輩の男を振り向いてにらんだ。じゃが村長はほっとするように年輩の男にうなずいた。

「なるほど、それも道理や。だれか巫女さんと呼んでこい」

例のニキビ面の男は不服そうな表情になっておった。

「この土砂降りの中をかな」

「雨は激しゅうなるばかりや。そんなことは言うておれん。すぐに来てもらえ」

村長の言うことじゃったから仕方がない。体の大きな若者を選んで巫女さん呼びに行かせたんじゃった。若者はすぐに蛇の目傘をさして巫女さんを背おってやって来た。

「えらい雨の中、無理を言うたな。このままでは作物が全部流れて飢饉になつるやも知れん。そしたら多くの村人が死ぬことになる。こないだの日照りの時は龍神さんをお願いして助けて貰った。巫女さん、今度はどうしたら良からうかのう」

「道々若い衆に聞いたがやっぱり人柱をたてることじゃ。さすれば、龍神様の溜飲も下りて雨も止むじやろう」

「しかし、村人の誰かが犠牲になる。誰も死ななくて良い方法はないものかのう」

「一人が人柱になればたくさんの田畑や家が助かり、村人が飢饉で餓死することもなくなる。先ずは人柱じゃ」

「クジで決めるという手も出ておるが、それでは効き目がいかも知れん。どうせ生贄にするなら龍神さんに喜んでもらえる者が良じやろう。誰を人柱にすれば良か、ここで巫女さんに占うてもらおやないか。皆の衆、どうじゃ」

皆の衆は再びしいーんとなってしもうた。しかし、今度は巫女さんが占って決めるのじや。誰も文句の言いようがなかった。

巫女さんは蛇の目傘を振り払うと大きな菰野石の上にぺたっと座り込んだ。首から下げた長い数珠を両の手でもみながら腕と言わず、顔面と言わず体全体を菰野石の鬼面にぶつけた。石にぶつけて体全体に傷がついた。激しい雨にぬれて体にまとわりついた白い法衣が朱にそまった。

「ああ、ううっ」

皆の衆は大きな菰野石の上で七転八倒する巫女さんに釘付けになった。体にまといついておった巫女さんの法衣は激しい動きではだけ、長い黒髪が白い肌の上に張りついておった。

ややしばし、巫女さんはぐったりして大きな菰野石の上うつ伏した。激しい雨足に人々は黙り、木々だけがざざー、ざざーと悲鳴を上げておった。

巫女さんが突然立ち上がった。まどつておった白い法衣は脱げ落ちて全裸になっておっ

た。傷はついておるものの濡れて光った巫女さんの妖艶な裸体がすーっと例のニキビ面の男の前に移動した。

「そなたじや。龍神様が生贄としてお召しになるのは」

男は大きな目玉を剥いて巫女さんを見た。

「何で俺らが」

激しい雨に一刻の猶予もできなかった。誰かが後ろからニキビ面の男に縄をかけた。ニキビ面の男は大声を出して抵抗したが、皆で寄ってたかつて人柱にしてしまったんじや。今でも大雨がふると砂ごしの辺りでは男の叫び声にも似たごうごうと云う音がする。

さて、見なれぬお方たち、大分時間が過ぎてしもうた。私の話、ご満足いただけましたじやろうか。おおっ、冷えた肉まんて申し訳なかったが全部たいらげて下さったか。ちょうど今は狩猟の期間じやによって猟犬にねらわれたり鉄砲でうたれたりせぬように、尻尾を出さぬように気をつけてお帰りなされ。それではお方たち、また。

「完」

ふやす 作「菰野物語」